福島県喜多方市
灰塚山古墳第６次発掘調査報告

辻　　秀人・佐藤　由浩・相川ひとみ・鈴木　舞香
平　　大貴・酒井　　瞳・鈴木　千賀・結城　　智・清野　寛仁
岡本　莉奈・斎藤　千晶・窪田　麿実・佐伯鉄太郎
髙橋多津美・横山　　舞・宮崎真理子

調　査　体　制

調 査 期 間　平成 28 年 8 月 7 日～8 月 22 日、8 月 28 日～9 月 8 日
調 査 主 体　東北学院大学文学部歴史学科考古学専攻辻ゼミナール
調 査 担 当　東北学院大学教授　辻　秀人
調　査　員　佐藤由浩（大学院博士課程前期 2 年）
相川ひとみ（大学院博士課程前期 1 年）
梅宮崇成・鈴木舞香・白銀沙也佳・吉原夏海・石山朋美・
野村真吾・小丸雄大・木村　智・宮崎真理子（4 年生）
平　大貴・酒井　瞳・鈴木千賀・結城　智・清野寛仁・
岡本莉奈・斎藤千晶・窪田麿美・佐伯鉄太郎
髙橋多津美・横山　舞（3 年生）
調査参加者　高橋伶奈・加藤雄大・庄司　舞・賀屋由布（2 年生）
小池和香・徳江真奈美（1 年生）
調 査 協 力　喜多方市教育委員会・植村泰徳（喜多方市教育委員会）
山中雄志（磐梯町）・片岡　洋（喜多方市）
田部成彦（新宮区区長）
上野正典・後藤直人・田部文市・渡辺和男
近　輝夫・近ノリ子（敬称略）
土地所有者　新宮区

写真 1　灰塚山古墳調査風景（第 2 主体部）

例　　言

1、 東北学院大学考古学辻ゼミナールでは平成23年から福島県喜多方市灰塚山古墳の発掘調査を6年間にわたって継続して実施してきた。本書は平成28年8月7日～8月22日、8月28日～9月8日実施した福島県喜多方市灰塚山古墳第6次発掘調査の報告書である。

2、 調査は東北学院大学文学部歴史学科考古学専攻辻ゼミナールのゼミ活動の一環として実施したものである。

3、 調査は東北学院大学文学部教授辻秀人が担当した。調査の主な参加者は東北学院大学大学院文学研究科アジア文化史専攻学生、考古学ゼミナール所属学生を中心とする東北学院大学文学部歴史学科の学生、考古学実習Ⅰを履修する学生、参加を希望した歴史学科1・2年生である。

4、 出土遺物、作成図面の整理作業は東北学院大学文学研究科博士課程前期所属学生及び文学部歴史学科考古学ゼミナール所属の3、4年生が中心となって実施した。

5、 本書の編集は辻秀人が担当し、執筆は参加者が分担した。各項目の執筆者は文末に記した。報告の記載は各執筆の原稿に辻が加筆訂正を行ったものである。従って最終的な文責は辻にある。

6、 本書に掲載した図面の高さ表示はすべて海抜高、北はすべて真北を示す。

7、 本書は鉄製品、有機質の保存処理実施前に作成しており、ここに掲載する実測図は最終的な図面ではない。保存処理終了後あらためて遺物の理解を含めて報告書を作成する予定である。

これまでの調査概要

平成23年　**第1次調査　平成23年8月10日～9月12日**

調査内容　墳丘測量　墳丘構造の解明

調査成果　墳丘を清掃し、墳丘測量図の精度確認。
墳丘内に第1、3トレンチを設定し、墳丘構造の様相を把握。
墳丘前方部墳頂部に第3トレンチ、後円部墳頂に第4トレンチを設定し、墳頂平坦面の上面精査。

平成24年　**第2次調査　平成24年8月6日～9月12日**

調査内容　墳丘構造の確認

調査成果
・第前方部墳頂平坦面の第3トレンチを拡張し、墳頂平坦面の様相確認。
・後円部墳頂平坦面の第4トレンチを拡張し、墳丘上に1辺10m程度の塚状遺構が存在することを確認
・くびれ部両側に第6、7トレンチを設定し、くびれ部を確認

平成 25 年　**第 3 次調査　平成 25 年 8 月 5 日～9 月 11 日**

調査内容　墳頂平坦面の塚状遺構掘り下げ

調査成果　江戸時代の礫石経を確認

塚状遺構下層で墓壙および陥没坑と想定される遺構を確認

後円部東西に第 8、9 トレンチを設定し、後円部墳丘構造を確認

平成 26 年　**第 4 次調査　平成 26 年　8 月 5 日～9 月 11 日**

調査内容　後円部墳頂の礫石経塚の掘り下げ

調査成果　礫石経塚の全容を解明

礫石経塚下層を精査　墓壙平面、陥没坑の確認

平成 27 年　**第 5 次調査　平成 27 年 8 月 5 日～9 月 4 日**

調査内容　墓壙内掘り下げ

調査成果　墓壙内古墳主軸上に粘土槨上面（第 1 主体部）、墓壙東側に小型粘土槨（第 2 主体部）を確認

墓壙埋土を精査、切り合い関係を確認

これまでに公表された報告書

福島県立博物館　1987 年『古墳測量調査報告』福島県立博物館調査報告第 16 集

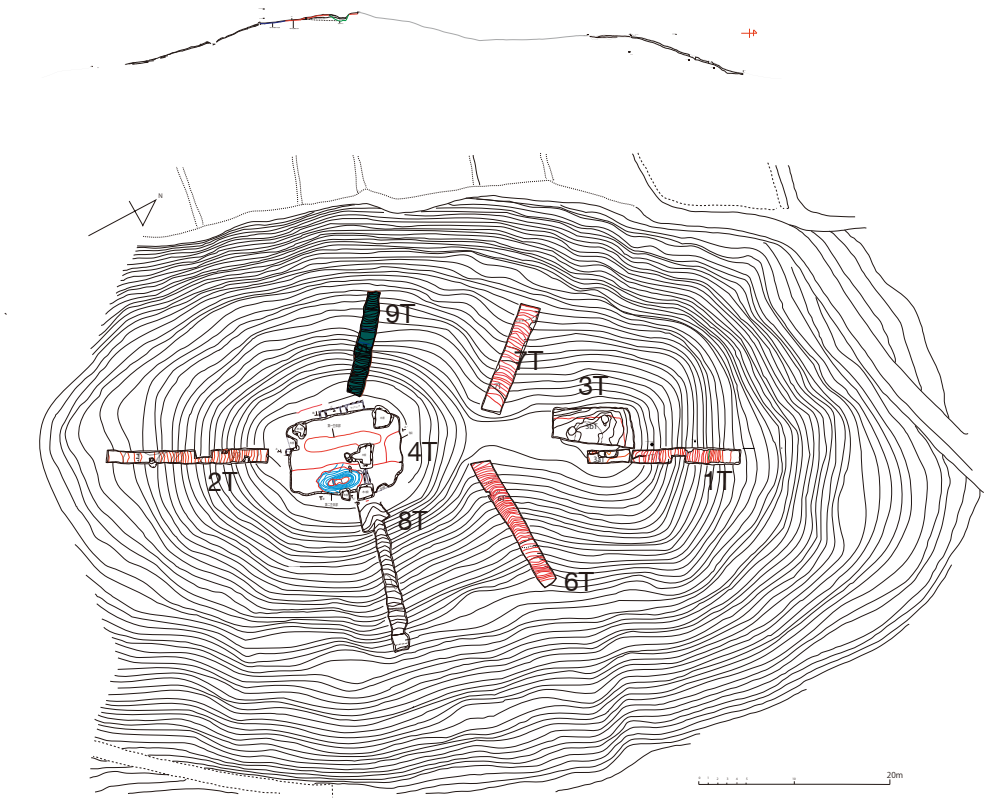
辻　秀人他　2012 年「福島県喜多方市灰塚山古墳第 1 次発掘調査報告」『東北学院大学論集　歴史と文化』第 48 号

辻　秀人他　2013 年「福島県喜多方市灰塚山古墳第 2 次発掘調査報告」『東北学院大学論集　歴史と文化』第 49 号

辻　秀人他　2014 年「福島県喜多方市灰塚山古墳第 3 次発掘調査報告」『東北学院大学論集　歴史と文化』第 52 号

辻　秀人他　2015 年「福島県喜多方市灰塚山古墳第 4 次発掘調査報告」『東北学院大学論集　歴史と文化』第 53 号

辻　秀人他　2015 年「福島県喜多方市灰塚山古墳第 5 次発掘調査報告」『東北学院大学論集　歴史と文化』第 54 号



第 1 図　灰塚山古墳トレンチ配置図

写真 2　調査風景

序章　調査の目的

東北学院大学辻ゼミナールでは、東北古墳時代の様相を解明することを目標として活動を継続している。福島県会津地方に多く古墳が分布することはこれまでによく知られてきた。中でも会津盆地東南部の一箕古墳群、東北部の雄国山麓古墳群、西部の宇内青津古墳群では前期の首長墓の系譜を 3 代以上にわたってたどることができる、有力な古墳群である。（辻　2006）。調査の対象とした喜多方市灰塚山古墳は宇内青津古墳群の最も北に位置する前方後円墳である。

灰塚山古墳はこれまで、福島県立博物館によって測量調査が実施され（福島県立博物館 1987）、全長 60 m を超える大型前方後円墳であることが判明している。宇内青津古墳群では亀ヶ森古墳に次ぎ 2 番目の規模である。古墳の形態も宇内青津古墳群の中ではやや異質であり、最北を占める位置もあってその内容が注目されてきた。ただ、出土遺物が知られておらず、所属時期等についての手がかりがなく、古墳の範囲も測量段階では必ずしも明確にはされていなかった。

これまでに実施した第 1～5 次調査では、後円部、前方部、くびれ部の墳丘構造がほぼ明らかになるとともに、後円部墳頂にある方形の塚状遺構が礫石経塚であることが判明した。第 4 次調査では、礫石経塚の全体像を理解し、礫石経塚の掘り下げを実施した。礫石経塚の調査終了後、礫石経塚の下層にあたる後円部墳頂平坦面を精査し、墓壙と陥没坑を検出することができた。前回の第 5 次調査では、墓壙と陥没坑を掘り下げ、埋葬施設の探索を行った。その結果、墓壙内古墳主軸上で検出した南北に長い陥没坑が木棺痕跡である可能性が高まった。また、墓壙内東側で確認されていた小礫集中部下層の粘土が広がりを追跡したところ、船底状を呈する長楕円形の粘土の構築物が存在することが判明した。第 5 次調査の段階では、この構築物は粘土槨の上面の可能性を考えた。また、南北 4 m、東西 2 m、高さ 80 cm の規模と形状と主軸上の木棺痕跡とほぼ軸をそろえることから、二つ目の埋葬部であると考えられた。

今年度の調査では第 5 次調査の段階で所在を確認していた主軸上の木棺痕跡（第 1 主体部）と粘土槨の上面かと考えられた粘土の構築物（第 2 主体部）を掘り下げ、灰塚山古墳の埋葬施設を明らかにすることを目的に調査を実施した。

引用文献

福島県立博物館　1987 年　『古墳測量調査報告』福島県博物館調査報告第 16 集
辻　秀人　2006 年　『東北古墳研究の原点　会津大塚山古墳』新泉社

写真 3　第 5 次調査検出埋葬施設全景（南から撮影）

写真 4　第 1 主体部北半部検出状況

写真 5　第 1 主体部全体検出状況

写真 6　第 2 主体部全景

第 1 章　古墳の立地

第 1 節　古墳と周辺の地形

灰塚山古墳は喜多方市慶徳町新宮字小山腰 2908-1 に所在する。会津盆地の西側を画する越後山地の東側の縁辺にあたる丘陵上に立地する。会津盆地の平坦地と西側山地との境界にあたる。丘陵末端部で、周囲を解析された独立丘陵の頂上部分に古墳が築かれている。丘陵を構成する土は七折坂層で、河川の堆積物である砂層、礫を主体とし、火砕流堆積物も含まれる。七折坂層は断層が至近距離にあるため、層位が傾斜している。(註 1)。

第 2 節　歴史的環境

灰塚山古墳は会津盆地西部に分布する宇内青津古墳群中の北端に位置する大型前方後円墳である。宇内青津古墳群を構成する主な古墳は前方後円墳 12 基、前方後方墳 3 基で会津盆地の平野部から西側丘陵上まで広く分布している。最古段階は会津坂下町杵ガ森古墳、臼ガ森古墳で、古墳時代前期でも古い段階にあたる。福島県最大の前方後円墳である亀ヶ森古墳とその横に並ぶ前方後方墳の鎮守森古墳、出崎山 3 号墳、7 号墳が前期古墳と考えられている。中期、後期になると古墳は減少し、わずかに長井前ノ山古墳が中期、鍛冶山 4 号墳が後期と考えられている。天神免古墳は前期または中期で所属時期が確定していない。

ところで、近年喜多方市古屋敷遺跡が発掘調査の結果、中期後半の豪族居館であることが判明し、国の史跡に指定された。古屋敷遺跡に拠点をおいた首長の墓は当然宇内青津古墳群中にあるのが自然である。現在その候補として古屋敷遺跡に近い天神免古墳、虚空蔵森古墳、灰塚山古墳などが挙げられているが、古墳の築造時期が明確でないため、古屋敷遺跡と対応する古墳は確定していない。

灰塚山古墳の立地する独立丘陵は、国指定史跡新宮城跡と接し、すぐ西側にあたる。新宮城跡は中世の城館跡であり、中心部分はよくその本来の姿をとどめている。その中心は 14 世紀にあり、15 世紀まで存在したと考えられている。灰塚山古墳は新宮城から西側を見た時に、最も近い丘として目に入る位置にある。灰塚山古墳の位置に新宮氏の墓所が想定されており、中世においての何らかの意味をもち、使われた可能性もある。

註 1　福島県立博物館竹谷陽二郎氏のご教示による。

第 2 図　宇内青津古墳群分布図

写真 7　灰塚山古墳遠景（西から）

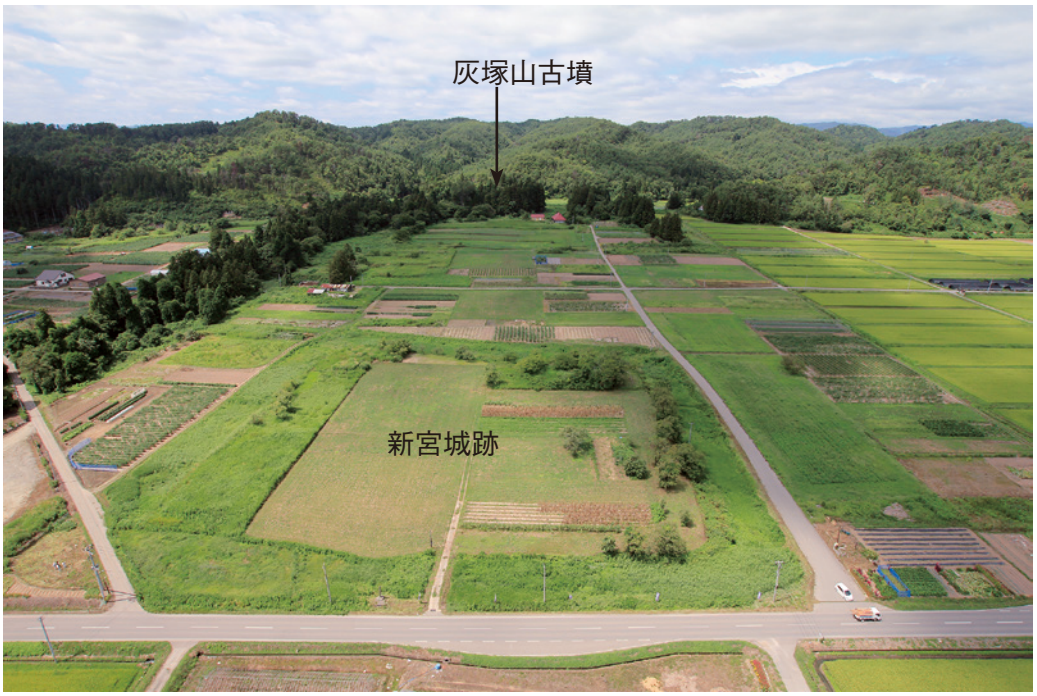


写真 8　灰塚山古墳遠景（東から）

第 2 章　発掘調査成果

今年度は第 5 次調査までで確認していた 2 基の埋葬施設の様相を明らかにすることを目的に調査を実施した。調査開始の時は、墓壙内にあって古墳の主軸にほぼ位置を合わせている木棺痕跡と見られる陥没坑（第 1 主体部）が灰塚山古墳の主たる埋葬施設、その西側にあるやや小型の粘土槨の上面かと考えられた。粘土の構築物（第 2 主体部）は相対的に新しく、副次的な埋葬施設と考えていた。また、第 1 主体部は陥没坑内に多くの白色粘土が観察されることから粘土槨天井部が崩れた状態である可能性が考えられていた。以下埋葬施設ごとに調査所見を説明したい。　（酒井　瞳、鈴木千賀）

1　第 1 主体部（第 3 図　写真 8）

（1）　木棺痕跡の掘り下げ

墳頂平坦面を精査して第 5 次調査の成果を再確認した後、第 1 主体部の中軸線あたる部分に幅 10 cm の土層観察用の断面、中軸線に直行する形で幅 20 cm 幅の断面を 3 本残し、土層の観察を行いながら陥没坑内を掘り下げた。

約 40 cm ほど掘り下げたところ西側に粘土槨の天井部が崩落した部分であると思われる白色粘土が広がり、最初の段階ではこの部分を粘土槨上面と認識した。白色粘土の広がりをおいかけて掘り下げを行った。掘り下げた段階で、西側部分では白色粘土の底面と立ち上がりを確認することができたが、東側では立ち上がりを確認することができず、白色粘土が東に広がる可能性が想定された。そこで土層観察用の断面の位置を移動し、改めて陥没坑内の小区画を設置し掘り進めた。小区画は北側から A, B, C, D 区とした。

新たな小区画を用いて土層観察用の断面を残してさらに東に掘り進めたが、東側の白色粘土の立ち上がりは確認できず、やむを得ず 2 箇所に 30 cm 幅のサブトレンチを設置し掘り進めた。サブトレンチの掘り下げ中にガラス玉、竪櫛、青銅鏡が出土した。これら遺物の出土により、白色粘土の上面が棺の内部であることが判明し、底面での掘り下げを停止した。サブトレンチを東側に掘り進めたところ、東側の白色粘土の立ち上がりを確認することができた。また平面上においても土質の違いから陥没坑の再確認を行った。サブトレンチで確認されていた白色粘土の立ち上がりを追いかけて東側全体で掘り上げたところ、西側よりも低い位置で白色粘土が収束していることがわかった。新たに認識された陥没坑の中軸線に 20 cm 幅の土層観察用の断面を設置し、床面を精査した。床面近くに黒色とオレンジ色のブロック状の層が存在しこれを木棺が腐ったものと推定している（写真 9）。

粘土槨の天井部が落ちた状態を想定して掘り下げを開始した。しかし、白色粘土上面で遺物が出土し、白色粘土上面が棺の床面であり、陥没坑の壁面と見ていた側面の立ち上がりが木棺痕跡の側壁にあたることが判明した。掘り下げた土層には粘土槨の天井部が想定される粘土層は存在しなかった。

従って、棺の上部は粘土で覆われておらず、埋葬施設は白色粘土上に設置された木棺と

考えた。埋葬施設の構造は粘土床の木棺直葬と考えられる。

（2）　木棺痕跡

木棺痕跡は、ほぼ古墳主軸上にあり、南北 8.3 m、東西約 1.7 m を測る。平面形はほぼ長方形を呈し、東西幅の変化はほとんどない。東西横断面はいずれも底面で幅 70 cm 前後、上端で幅 170 cm 程度、深さ 60 cm 程度を測り、箱形に近い形状を示している。南北縦断面はおおむね平坦だが、棺の両端は南北いずれも緩やかに立ち上がる。全体の形状は船底から船首、船尾にいたる形状に類似する形状である。

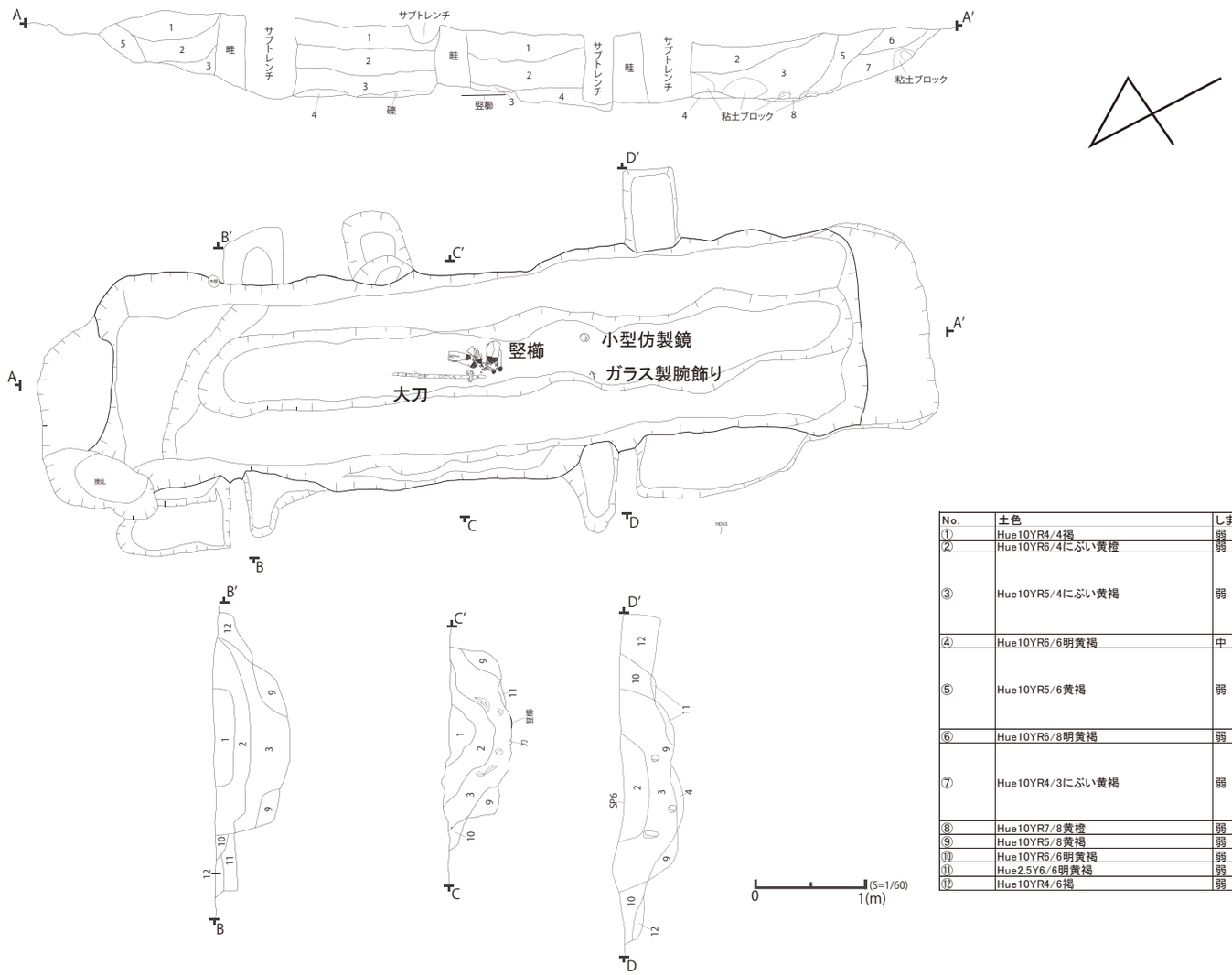
写真 9　第 1 主体床面付近の土層

横断面の形状からみて、木棺は木をくりぬいたものではなく、組合せ式であった可能性が高い。南北両端は斜めに立ち上がっていくことも合わせて全体に古墳時代の舟の形状を思わせる。

なお、木棺痕跡底面には幅 15 cm 程度、深さ 2 cm 程度の浅い溝がある。溝の下面には小礫群が存在し、排水施設と見られる。従って木棺底部の形状を反映したものではないと考えている。

墓壙埋め土の構造や粘土床の構築手順等については今後の調査で明らかにしていく予定である。

（結城　智）

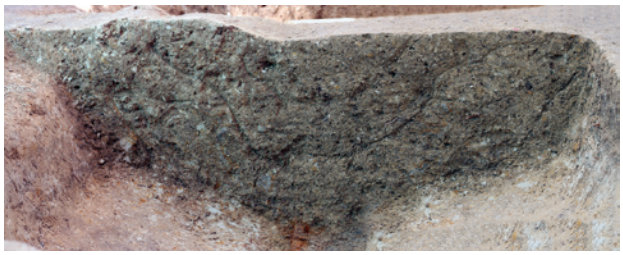


No.	土色	しまり	粒度	粘性	備考
①	Hue10YR4/4褐	弱	シルト	弱	
②	Hue10YR6/4にぶい黄橙	弱	シルト	弱	
③	Hue10YR5/4にぶい黄褐	弱	シルト	弱	Hue10YR6/2灰黄褐 Hue7.5YR5/6明褐 ブロック状にグレーとオレンジの層が存在している （粘土ブロック）
④	Hue10YR6/6明黄褐	中	砂交じりの粘土	中	
⑤	Hue10YR5/6黄褐	弱	シルト	弱	Hue10YR6/2灰黄褐 Hue7.5YR5/6明褐 ブロック状にグレーとオレンジの層が存在している （粘土ブロック）
⑥	Hue10YR6/8明黄褐	弱	シルト	弱	
⑦	Hue10YR4/3にぶい黄褐	弱	シルト	弱	Hue10YR6/2灰黄褐 Hue7.5YR5/6明褐 ブロック状にグレーとオレンジの層が存在している （粘土ブロック）
⑧	Hue10YR7/8黄橙	弱	シルト	弱	礫が多い
⑨	Hue10YR5/8黄褐	弱	シルト	弱	
⑩	Hue10YR6/6明黄褐	弱	シルト	弱	
⑪	Hue2.5Y6/6明黄褐	弱	シルト	弱	掘りすぎた箇所
⑫	Hue10YR4/6褐	弱	シルト	弱	

第 3 図　第 1 主体部（木棺痕跡）平面、断面図

写真 10　第 1 主体部（木棺痕跡）完掘状況

B 区南壁断面



C 区南壁断面

D 区南壁断面

写真 11　第 1 主体部　土層断面写真

写真 12　木棺痕跡南端立ち上がり状況

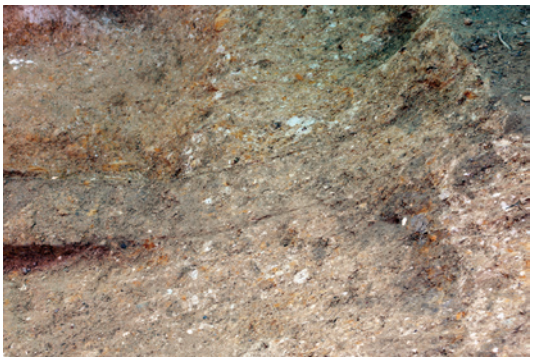


写真 13　木棺痕跡北端立ち上がり状況

（3）　遺物出土状況

①　遺物の出土位置関係

第 1 主体部からは青銅鏡（仿製鏡）1、ガラス製腕飾り（ガラス小玉 13）、竪櫛（大小合わせて 30 以上）、大刀 1 が出土した。いずれも底面直上の黒色とオレンジ色のブロック状の層から出土しており、木棺の底面に置かれたものと判断された。

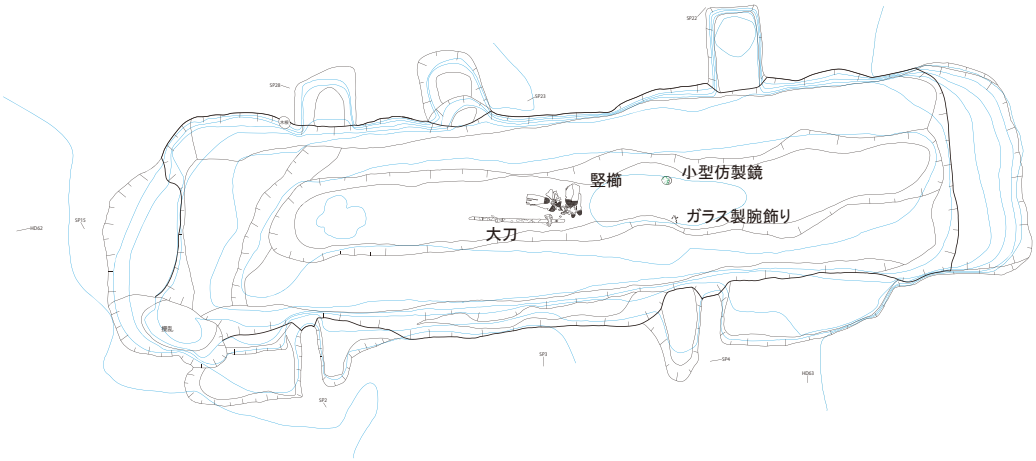
鏡は第 3、4 図に示したように木棺痕跡の中央よりやや南側に寄った位置から出土した。また、青銅鏡の西側でガラス製腕飾りが出土した。

鏡、腕飾りからやや北に離れ、棺の中央付近で大刀と多量の竪櫛が出土した。大刀の切っ先は北に向いていた。

これらの遺物は動かされた形跡はなく、出土状況は埋葬時に置かれた位置をほぼそのまま示していると考えられる。鏡、腕飾りと竪櫛、大刀のまとまりはやや離れていることをどう考えるかは解釈の余地はありそうだが、大刀が被葬者の体の脇に置かれていたと仮定すると、大刀の位置、切っ先の方向から見て、被葬者の体は棺の中央部分に頭を南西に向けて埋葬されていたと考えられよう。この場合、大量の竪櫛は被葬者の胸の上付近に置かれたことになる。また、鏡、腕飾りと大刀、竪櫛のグループとの空間があり、被葬者の頭はこの位置にあって、鏡と腕飾りは被葬者の頭の上に置かれたと見られる。

頭位が南西という例は少なく、極めて異例だが、例がないわけではない。また、同一棺複数埋葬という可能性も否定はしないが、少なくとも調査所見には複数埋葬を考え得る要素はなく、ここでは採ることはできない。

写真 14　第 1 主体部遺物出土位置関係



第 4 図　第 1 主体部遺物出土位置

②　鏡の出土状況

第 1 主体部木棺痕跡内のやや南よりの位置で鏡背面を上にした状態で出土した。完形である。出土時に（写真 15）に示すように鏡背面上に有機質が比較的厚く観察された。また、取り上げ段階で鏡面の下に保存良好な木片が鏡面に付着しており、鏡が木製の箱に入っていたことを示していた。また、鏡背面の一部には布目が観察され、布にくるまれていたか布製の袋に入れられていたと考えられた。調査の段階では木質を残すために鏡背面を全面的には露出しなかったが、外区と内区の境に圏線がめぐること、内区に文様があることが観察された。（鈴木舞香）

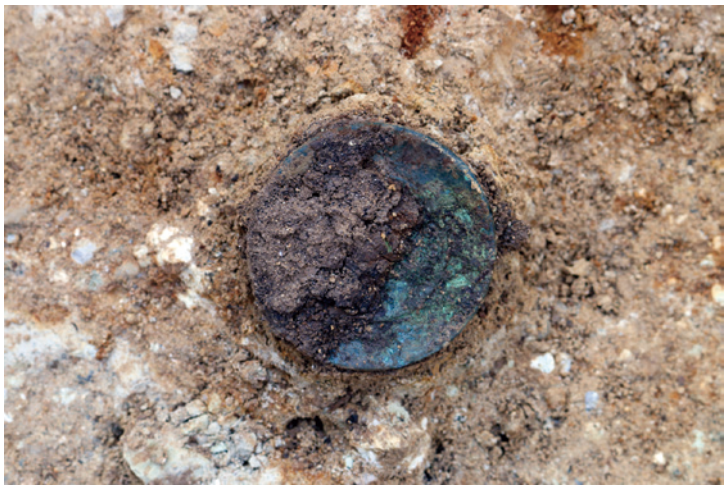
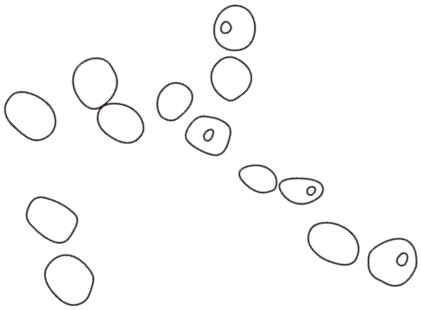


写真 15　第 1 主体部　鏡出土状況

③　腕飾り（ガラス小玉）出土状況

第 1 主体部木棺痕跡内のやや南よりの位置、棺の東側でで出土した。ガラス小玉 13 個で構成される腕飾りである。木棺痕跡底面から出土した。第 5 図、写真 16 に示すように、ガラス小玉は一部を除いて円弧を描く線上に連なる形で出土している。本来は糸で連ねられていたと見られる。（佐伯鉄太郎）



第 5 図　腕飾り出土状況実測図
（縮尺 1/1）

写真 16　第 1 主体部　腕飾り出土状況

④　竪櫛出土状況

第 1 主体部中央付近で、大刀の柄頭に近接して大量の竪櫛が集中して重なった状態で出土した。重なった状態のため、総数は確定できないが、大小取り混ぜて 30 個体以上は出土している。全長 20 cm、幅 5 cm 前後の大型品と幅 1 cm 程度の小型品がある。大型品は漆膜の下に竹材も残存しているものが多い。櫛歯と小型の櫛は漆膜のみの残存が多い。また、「棒状突起」（川村　1999）を持つもの、複数の小型竪櫛が大型竪櫛の棒状突起部分に取り付けられている状態のもの（以下「飾り」）が確認できる。

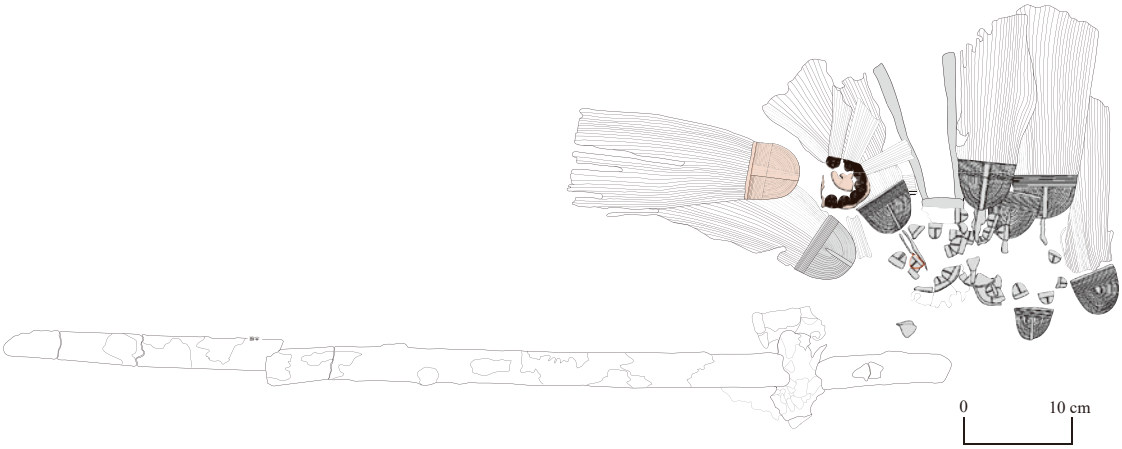
残存状況･重なりの関係から全容は不明ではあるが､大型のものが 8 個（うち 7 個が「棒状突起」を持つ)､「飾り」と想定できるものが 4 組、その他小型のものが複数見られる。おそらくは散らばっている小型のものも「飾り」であったと考えられる。

出土竪櫛は大小問わず黒漆が塗布されており、湾曲結歯式である。北側の飾り付き竪櫛は黒漆で加工した後、赤漆を塗布している。

出土竪櫛群はその重なりの順序がよく見て取れる。頭位である南西側から順々に重ねていき、ばらまかれたというよりは何らかの意図をもって置かれたと考えられる。

（相川ひとみ）

写真 17　第 1 主体部　大刀と竪櫛群出土状況



第 6 図　大刀と竪櫛出土状況

⑤　大刀出土状況

大刀は第 1 主体部中央部やや西よりの位置から出土した。木棺痕跡底部から出土しており、埋葬遺体の脇に置かれた副葬品と理解される。柄頭を南に、切っ先を北に向けており、東側に刃を向けている。柄頭付近では漆膜が覆うようすが観察された。漆膜がどのようなものに塗布されていたのかは判断できなかった。（平　大貴）

（4）　出土遺物

①　青銅鏡

比較的保存状態の良好な青銅鏡である。鏡背面は 4 分の 1 程が緑青、布、紐痕跡で覆われおり観察は難しいが、他は明瞭に文様を観察することができた。面径 9.0 cm、面反り 2 mm、縁の厚み 3 mm、鈕径 1.5 cm、鈕高は 7 mm、鈕孔幅 6 mm を測る。平縁で、鏡背面の文様は外区内側、隆線による圏線に接して櫛歯文、さらにその外側に圏線が確認できる。しかし、ほとんどが、摩耗しており、その文様は不明である。隆線による圏線の内側に接して鋸歯文、鋸歯文の内側に二重の圏線、その内側にやや立体的な文様があり、最も内側に 1 条の圏線がめぐる。内区にはやや不規則に配され、一定しない盛り上がりで表現された文様がある。全て異なった形状をしており、直径 5 mm 程の円形のものから 8 mm の楕円形のもの、さらにその楕円形と円形が接着しくびれを持った形状のものが確認できる。また、これらの盛り上がりの一部から伸びる細長い形状のわずかな隆起線も数箇所確認できる。この文様が具体的に何を表したものか判然としない。

鏡背面の文様をどのように考え得るかは今後に残された大きな課題である。現状では森下章司氏が示す（森下　1991）古墳時代仿製鏡の三段階の内、4 世紀末から 5 世紀に位置づけられる仿製鏡の小型化、簡素化が特徴的な第二の段階の仿製鏡の一群と考えておきたい。

（鈴木舞香）

写真 18　第 1 主体部出土鏡

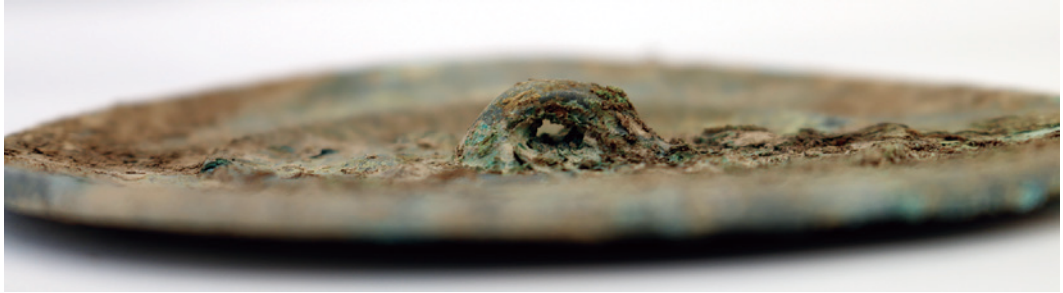
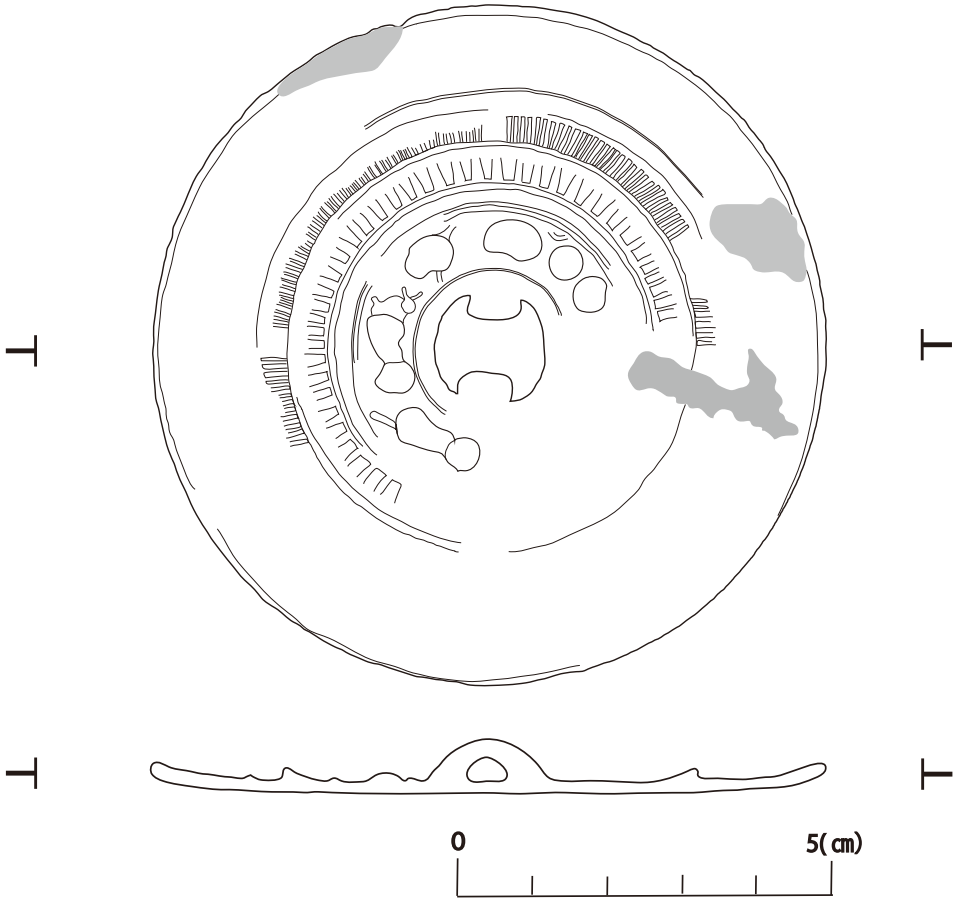


写真 19　第 1 主体部出土鏡鈕孔

写真 20　鏡背面周縁に残る布目

写真 21　鏡背面に残る紐痕跡

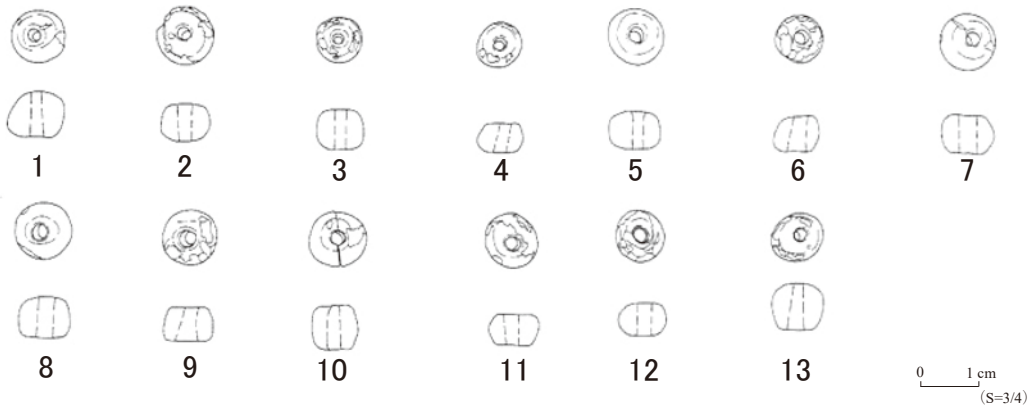


第 7 図　青銅鏡実測図

②　腕飾り（ガラス小玉）

ガラス小玉 13 個で構成される一連の装身具で、出土形状、大きさから見て腕飾りと判断された。ガラス小玉 13 個のうち 2 個は破損している。いずれも濃い紺色を呈する。直径は 8～10 mm、高さは約 8 mm、孔直径は約 2～3 mm である。　（佐伯鉄太郎）

写真 22　第 1 主体部　腕飾り（ガラス小玉）

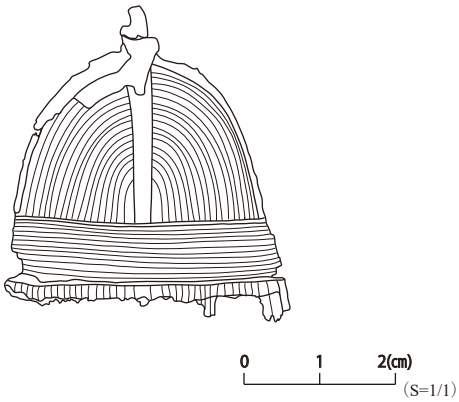


第 8 図　ガラス小玉実測図

③　竪櫛

第 9 図、写真 23 の竪櫛 1 個体は現場で取り上げたものである。規格はムネ幅 3.5cm・ムネ高 4 cm である。中央部を結束する糸が明瞭に確認できるほか、歯も一部残存している。残存状況から、櫛の製作手順が見て取れる。細く割いた竹の束の中央部を糸で縛り、そこを起点として折り曲げた後に、細く割いた竹で帯状に縛ったものと推測される。

写真 23　出土竪櫛写真



第 9 図　竪櫛実測図

上記の竪櫛 1 個体の他は薄い漆膜だけが残存していたため、個別には取り上げることができなかった。以下調査時と切り取り後に観察した所見を述べる。

竪櫛群が分布する範囲は、全体で南北約 50 cm・東西約 30 cm に及ぶ。大型品と小型品の 2 タイプがある。個体ごとの規格は、大きさに若干のばらつきはあるが。大型の櫛はムネ幅 4～6 cm・ムネ高 4～5 cm・櫛歯 13～16 cm、小型の櫛はムネ幅 1 cm・ムネ高 1 cm・櫛歯 5 cm である。大型・小型竪櫛共に第 9 図の竪櫛と同じ製作手順で作られたものと考えられる。しかし、群の中で最南に位置する大型の竪櫛 1 個体には中央部を結束する糸と巻縛部は確認できない。竹の束の中央部を糸で縛ることはせずに折り曲げて製作されたものと考えられる。

大型品 8 個体のうち 7 個体には棒状突起があり、いずれも小型品と組み合わされて一つの葬送に用いられる道具（以下葬具と記述）を構成していたと考えられる。従って被葬者の胸の位置と推定される場所に 7 個体の葬送用の特殊な葬具が置かれていたことになる。

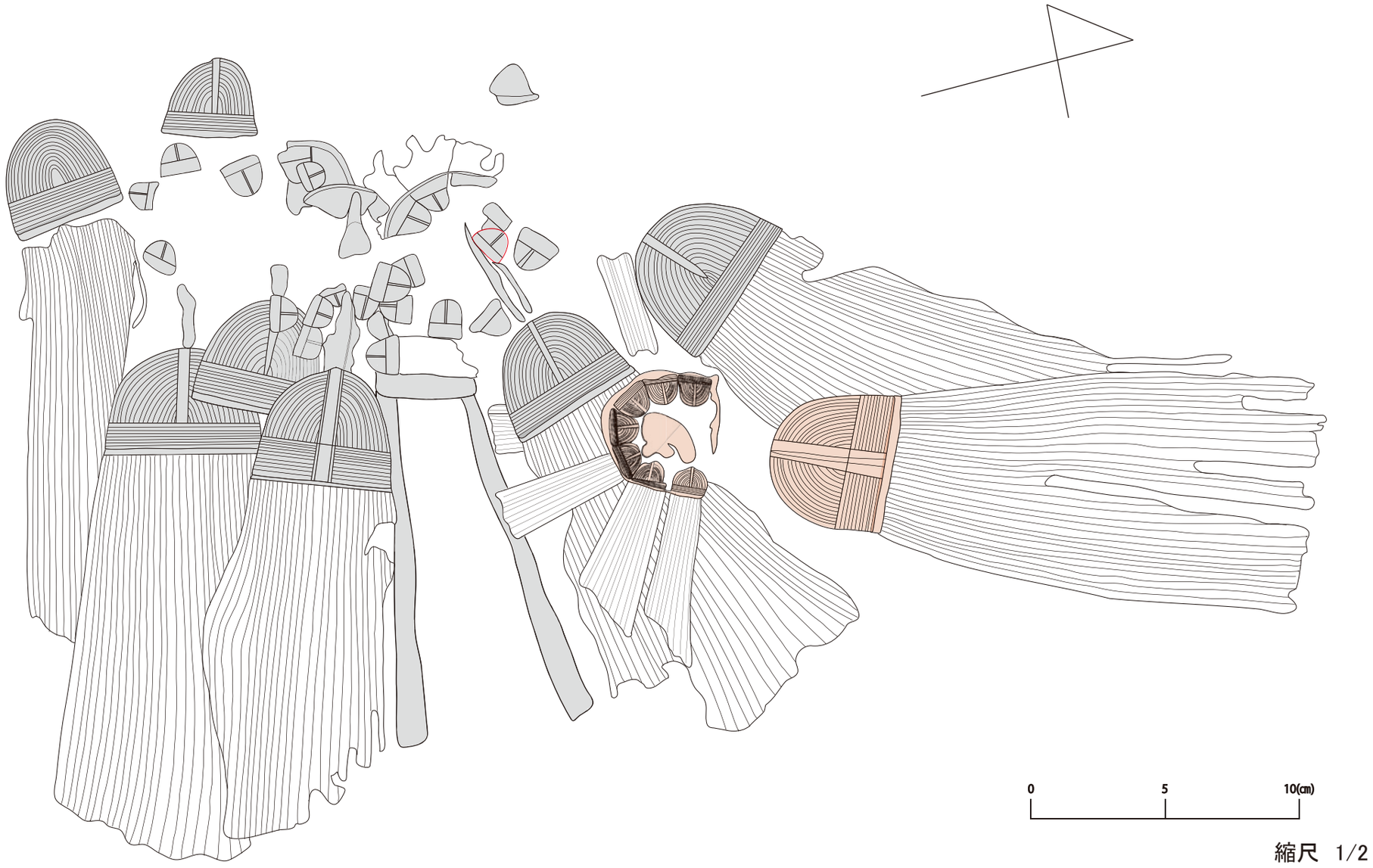
葬具群は被葬者頭位に近い棺主軸と直交方向に置かれた南側の一群と棺主軸に斜交ないし平行方向に置かれた北の一群の二つに分かれる。両群の間は少し間があいており、竪櫛とは異なる形の交差する 3 条の漆膜が観察されるが、現段階では詳細を明らかにすることはできなかった。

南側の一群は重複関係から最初に葬具の形をとらない単独の大型櫛が最初におかれ、その上に南から 3 個の葬具が順番に置かれていったと見られる。北側の一群は斜交する二つの葬具は並べて置かれた後に、朱漆が塗られた葬具が置かれたと見られる南北両群の前後関係は分からない。

これらの竪櫛群は調査終了後に、松田隆嗣氏の指導のもとに発泡ウレタンで固めた上で切り取り、取り上げることができた。発泡ウレタンは市販のインサルパック HIPER ＃ 30 を 6 パック使用した。他に市販の 1 液タイプを使用したが十分な硬さを得られなかった。

（相川ひとみ）

写真 24　竪櫛群出土状況

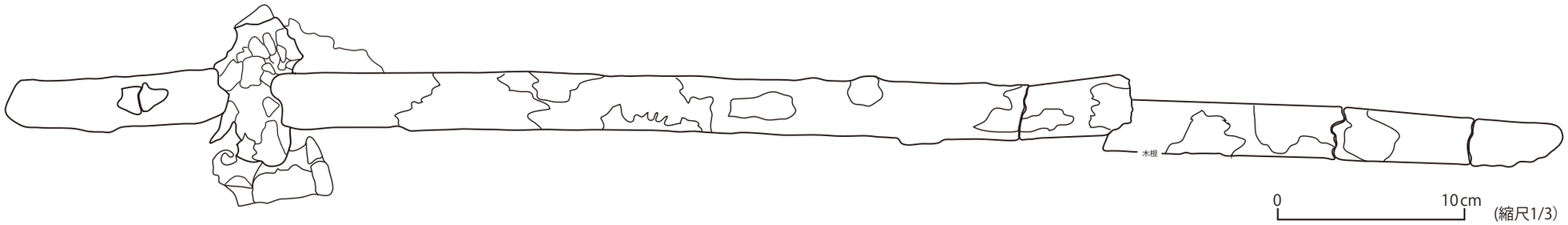


第 10 図　竪櫛出土状況実測図

写真 25　竪櫛群養生、切り取り準備

写真 26　硬質発泡ウレタン注入

写真 27　切り取り終了



第 11 図　第 1 主体部出土大刀実測図

写真 28　第 1 主体部出土大刀

④　大刀

第 1 主体部から大刀が一振り出土した。柄頭を南に、切っ先を北に向け、被葬者の遺体の脇に置かれたものである。保存状態が悪く、動かせない状態のため、保存処理終了を待って実測図を作成することとした。ここでは大刀が出土した段階での写真と実測図を提示する。大刀は長さ 84 cm を測る。茎は約 12 cm、目釘孔は木質に覆われて観察できない。柄には木質が多く残り、木装と判断される。柄元、鍔、鞘元部分には木質がかたまっているが、その形状は明瞭でない。関部も現状では観察できない。刀身は長さ 70 cm 弱で、幅 3 cm 程度を測る。ふくら切先である。刀身には木質も付着しており、鞘に入った状態と判断した。（平　大貴）

2　第 2 主体部

(1)　粘土層の掘り下げ

第 5 次調査で確認された長楕円形の粘土の高まりの性格解明のため、四分法により粘土を掘り下げることとした。四分された区画を、北西側から反時計回りに第 1 区、2 区、3 区、4 区とし、掘り下げは第 2 区から開始し、土層断面を確認しながら 3 区、1 区、4 区と掘り進めた。

掘り下げにより、赤褐色と白色の粘土が交互に積まれている様子が観察された。すべての調査区において、赤褐色の粘土が最上層で検出され、また、白色の粘土層からは小礫が多数検出された。このことから、2 色の粘土には明確な区別があり、白色の粘土層には小礫を入れ、粘土表面には赤褐色の粘土を積むという、意識的な構築手順がうかがえる。なお、粘土層内からの出土遺物は無く、白色の粘土層内で検出された小礫をサンプルとして取り上げた。

粘土層を掘り下げた結果、組み合わされた板石群（以下石組み遺構）の上面に達した。

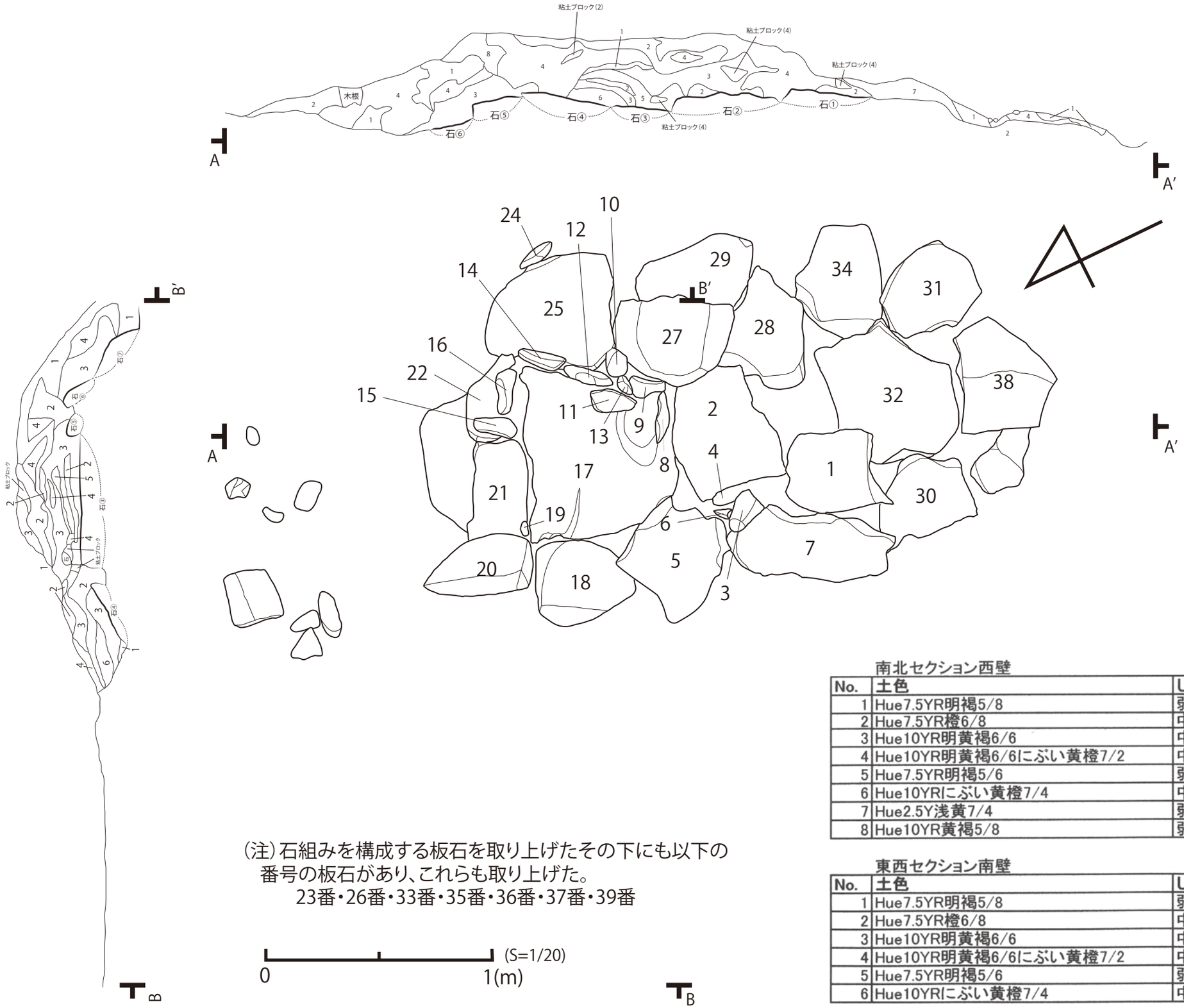
写真 29　粘土層と石組み遺構

（2）　石組み遺構

粘土層を取り除いた結果、写真 30、第 12 図に示したように板石を組み合わせた構築物が検出された。板石には第 1 表のように長さ 50 cm を越える大型石と長さ 20 cm 前後の小型石がある。石組みは全体に亀の甲羅状に構築されている。石の重なりから、中央部のやや大型の石で構成されている部分は古く、左右から立てかけられた状態の石は比較的小型で、中央の石が配置された後に立てかけられている。

石組み全体は、南北長 2.9 m、東西幅 1.6 m を測る。石は合わせて 39 個確認され、それぞれの特徴は第 1 表の通りである。ほとんどの石の下面には黒や朱による彩色がほどこされており、一部の石には、人為的に打ち欠いたような痕跡が認められる。また、4 番の石の裏面に鉄が付着していた。これは石の下に大量の鉄製品があり、その銹が付着したものである。なお、この石組みを構成する石材の産地は、古墳の北方にある喜多方市角間山であると喜多方市教育委員会からご教示いただいた。

写真 30　石組み遺構全景
（北から撮影）



(注)石組みを構成する板石を取り上げたその下にも以下の番号の板石があり、これらも取り上げた。
23番・26番・33番・35番・36番・37番・39番

南北セクション西壁

No.	土色	しまり	粒度	粘性
1	Hue7.5YR明褐5/8	弱	シルト	弱
2	Hue7.5YR橙6/8	中	シルト	中
3	Hue10YR明黄褐6/6	中	シルト	弱
4	Hue10YR明黄褐6/6にぶい黄橙7/2	中	シルト	弱
5	Hue7.5YR明褐5/6	弱	シルト	弱
6	Hue10YRにぶい黄橙7/4	中	シルト	弱
7	Hue2.5Y浅黄7/4	弱	シルト	弱
8	Hue10YR黄褐5/8	弱	シルト	弱

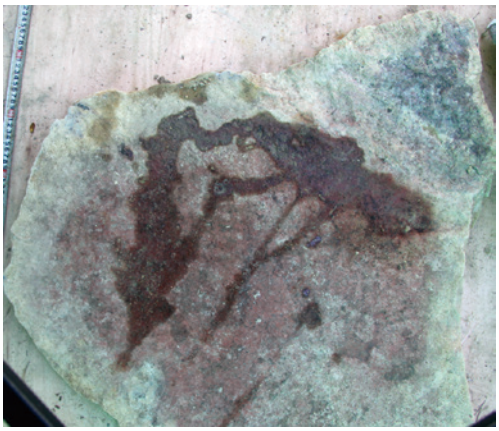
東西セクション南壁

No.	土色	しまり	粒度	粘性
1	Hue7.5YR明褐5/8	弱	シルト	弱
2	Hue7.5YR橙6/8	中	シルト	中
3	Hue10YR明黄褐6/6	中	シルト	弱
4	Hue10YR明黄褐6/6にぶい黄橙7/2	中	シルト	弱
5	Hue7.5YR明褐5/6	弱	シルト	弱
6	Hue10YRにぶい黄橙7/4	中	シルト	弱

第 12 図　石組み遺構全体図

石番号	最大径（cm）	最大幅（cm）	表面	裏面	備考
1	49	37.5		黒	天井部と側面の石にかかる位置より検出。
2	62	47.5		黒	石の側面に打ち欠き（?）の痕有り。 天井部の板石。 石棺蓋石の上の板石。
3	19.5	13			板石どうしの間を充填する小礫。
4	17.5	8			鉄が付着。 板石どうしの間を充填する小礫。
5	61.5	52	黒、薄い朱	黒	側石。一部天井部の石にかかる。
6	12.5	9			板石どうしの間を充填する小礫。
7	74.5	38	黒	黒	側石。
8	22.5	6.5		黒	板石どうしの間を充填する小礫。
9	15.5	13			板石どうしの間を充填する小礫。
10	20	9			板石どうしの間を充填する小礫。
11	19.5	10			板石どうしの間を充填する小礫。
12	22.5	10			板石どうしの間を充填する小礫。
13	10	9			板石どうしの間を充填する小礫。
14	22	10			板石どうしの間を充填する小礫。
15	17.5	9			板石どうしの間を充填する小礫
16	20	8			板石どうしの間を充填する小礫。
17	85.6	84		朱、黒	天井部の板石。 石棺蓋石の上の板石。
18	51	47		黒	側石。
19	5.5	3			板石どうしの間を充填する小礫。
20	56	42	黒点	黒	側石。一部天井部の石にかかる。
21	46	31		黒	石棺蓋石の上の板石。
22	42.5	39.5		黒	23 番の石と接合。 石棺蓋石の上の板石。
23	20	15.5		黒	22 番の石と接合。 15 番の石下より検出。
24	19.5	7		朱点	小礫。
25	63	54		黒	側石。
26	15.5	8.5			9・10・13 番の石下より検出。 板石どうしの間を充填する小礫。
27	55.5	43		朱	天井部と側面の石にかかる位置より検出。
28	58	41		黒	天井部と側面の石にかかる部分より検出。
29	62	56		朱点、黒点	側石。
30	50	45		黒点	側石。
31	52	44	朱点	黒	側石。
32	76	63		朱点、黒	天井部の板石。 石棺蓋石の上の板石。
33	88.5	56		朱、黒、朱点	32 番の石下より検出。 天井部の板石。 石棺蓋石の上の板石。
34	46	40.5		朱、黒	石表面に打ち欠き（?）の痕有り。 側石。
35	20.5	15	朱	朱	33 番の石下より検出。 板石どうしの間を充填する小礫。
36	19.5	15	赤		33 番の石下より検出。 板石どうしの間を充填する小礫。
37	51	37		黒	28・33 番の石下より検出。 天井部と側面の石にかかる部分より検出。
38	60	48		黒	南端の石。 石棺蓋石の上の板石。
39	37.5	27.5	黒、朱点	朱点	31・32・34 番の石下より検出。 石棺天井部と側面の石にかかる部分より検出。

第 1 表　石組み遺構構成石観察表



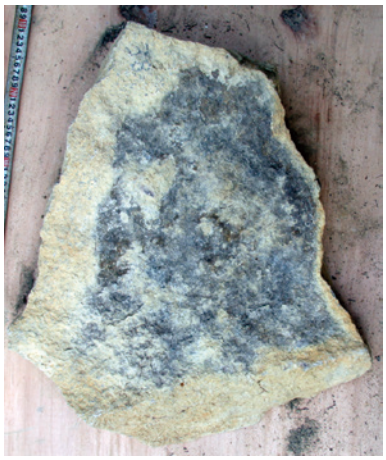
17　下面

25　下面

29　下面

33　下面

34　下面



38　下面

写真 31　石組み遺構構成板石下面に残る朱彩、黒彩

(3) 石棺

石組み遺構の板石群を除去した後、石棺本体を検出した。石棺蓋石上面から多くの遺物が出土したが、遺物出土状況は次項で述べる。

石棺の蓋石は 5 枚で構成される。北から 2 番目の蓋石だけがやや厚みがあり柱状であるが他はいずれも薄く、板石である。蓋石の重なりから、北から 3 番目の中央部分の板石が最後に置かれたと考えられる。北側は最北の石が最初に置かれ、次に 2 番目が置かれる。南側も同様で、最南の石が最初で次に 2 番目が置かれる。棺の蓋石は北は北から順に 2 枚が置かれ、南も同じく南から順に 2 枚が置かれて、最後に残された隙間を中央の石で塞ぐという手順を採ったと見られる。5 枚の蓋石で棺を覆った後に蓋石同士あるいは蓋石と側壁との間に小さな隙間が多くできてしまったために小さな石を差し込む形で隙間を塞いでいる。

石棺天井部は石を重ねながら構築するために平坦には構成できなかったようだ。最後に置かれた中央部分の板石上面が最も高く、南北ともにやや低く作られている。隙間から見える石棺内部の天井部も同様で、中央部分が最も高く、南北両側は低くなっている。隙間から見える範囲の石棺内面は全面真っ赤に彩色されている。

石組みの南側では粘性の強い白色の粘土が石組みを四角く囲む状態にあるのが明瞭に観察された。これは、石棺を埋納するための据え方に石棺設置後粘土を充填したと判断している。今回の調査では石棺の調査は進められなかったので、今後の調査でこの粘土層の広がり、構造、役割を追求したい。

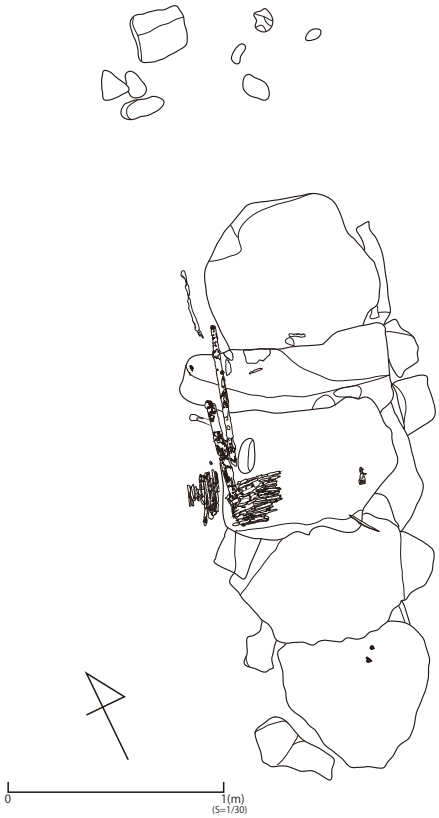
なお、次項で述べる多量の武器はまさに石棺の最後に被せられた蓋石の上に供えられている。時系列に沿って現状の知見で復元すれば、以下のようになるだろう。

（被葬者の死→殯→石棺内への埋納→）南と北から蓋石を置く→中央の石蓋で棺を閉じる
→中央の蓋石上に大刀、鉄剣（槍、戟 ?）供献→ 30 本程度の矢束を 2 つ供献
→板石で石組みを構築して石棺を覆う→石組み遺構の上に粘土を盛り、石組みを覆う

今回の調査では石棺内部、石棺構造等の調査を実施できなかった。従って石棺内の副葬品や被葬者に関する情報を知ることができなかった。また、石棺の構造や構築手順等解明すべき問題は多く残されている。これからの課題としたい。

（横山　舞）

写真 32　石棺上面　南から



第 13 図　石棺上面実測図

(4)　石棺蓋石上面遺物出土状況

石組み遺構を構成する板石を重なりの最上部から順にはずし、その内部を探索した。板石をはずしていくと、その下層に箱式石棺の上面が検出され、石棺の蓋石上に多くの鉄製品、竪櫛などが配置された状態で発見された。

出土遺物の構成は以下の通りである。(カッコ内は検出数量)

大刀（1）
鉄剣（槍先）（1）
板状鉄製品（1）
鉄鏃の束 A、B（2）
鉄鏃（2）
竪櫛（2）
管玉の破片（1）
漆膜（4）

① 石棺蓋石上面西側遺物出土状態

遺物群のうち大刀、鉄剣（槍先）、板状鉄製品、鉄鏃の束はいずれも、石棺の西側に集中して検出された。また、石棺西側には朱が散布している。このような状況から、石棺西側は埋葬後に行われる儀式の場であったと想定される。なお、石棺脇東側では朱の散布はごく微量であり、遺物は出土しなかった。

石棺蓋石の上面で検出された各遺物の位置関係は乱されておらず、埋葬を終了し、蓋石を被せた後置かれた状態をそのまま残していると考えられた。検出状況は次の通りである。

大刀 1 点と鉄剣（槍先）1 点は、石棺の西側に、それぞれ切っ先を南に向けた状態で平行する位置に置かれていた。大刀と鉄剣（槍先）にはいずれも木質が観察され、鞘に入った状態であると判断された。大刀の柄部は鉄剣（槍先）よりも 34 cm ほど北にあり、一見すると鉄剣と大刀はずれた位置に置かれたように見える。ただし、出土資料を槍先と見た場合、槍先の北方向の延長線上に帯状の漆膜と朱が点在する場所があり、これを槍の柄に塗彩された装飾とみることも可能である。この場合大刀と槍は切っ先方向も位置関係も揃えられていることになる。

さらに、鉄剣（槍先）の下層から交差する方向で板状鉄製品が出土している。板状鉄製品は鉄剣（槍先）と接合関係がある可能性が高い（写真 33）。接合関係が認められれば、鉄剣（槍先）と板状鉄製品が交差して結合されていたことになり、両者合わせて結合式の戟と理解することも可能である。この場合北方向の延長線上にある帯状の漆膜と朱が戟の柄の部分と見ることができる。ただし、板状鉄製品には刃がついておらず、武器としての機能に問題が生じることになり、疑問が残る。

また、鉄鏃の束が 2 つ出土した。鉄鏃束 A は石棺中央の蓋石の上で鏃先を西に向けた一群である。鉄鏃の先端は鉄剣（槍先）の上に乗っており、鉄剣（槍先）の後に置かれたものである。鉄鏃はすべて長頸鏃で、銹着により、確実に個体数を確定できないが、おおむね 30 本程度が観察される。鏃先は石棺真ん中の蓋石西端におおむね揃えられている。同じ石蓋の東端近く、鏃身の方向を延長した位置に漆膜が複数出土した。漆膜の方向も鉄鏃の延長線上にあり、鉄鏃が装着された矢柄に塗られたものと考えられた。位置関係から見て矢柄の本矧部分にあたる可能性が高い。従って、

写真 33　板状鉄製品と剣（槍先）との接合状況

鉄鏃の束は埋葬時には矢の束が供えられたものと見られる。つまり、鉄鏃の束は矢の束の存在を示すと考えられる。鏃身と本矧の位置から矢の長さは 75～80 cm 程度と推察された。

もう一つの鉄鏃の束 B は、大刀、鉄剣（槍先）の西側に方向を揃えて置かれていた。鏃先は鉄剣（槍先）先端と近い位置にあたる。A と同様にすべて長頸鏃で構成され、30 本程度で構成されていると見られた。石棺を構成する石上に漆膜が観察され、鏃身の延長方向にあたるため、A 群と同様に矢の状態で供えられたと見られる。鏃身と本矧の位置から矢の長さは 80 cm 程度と推察された。

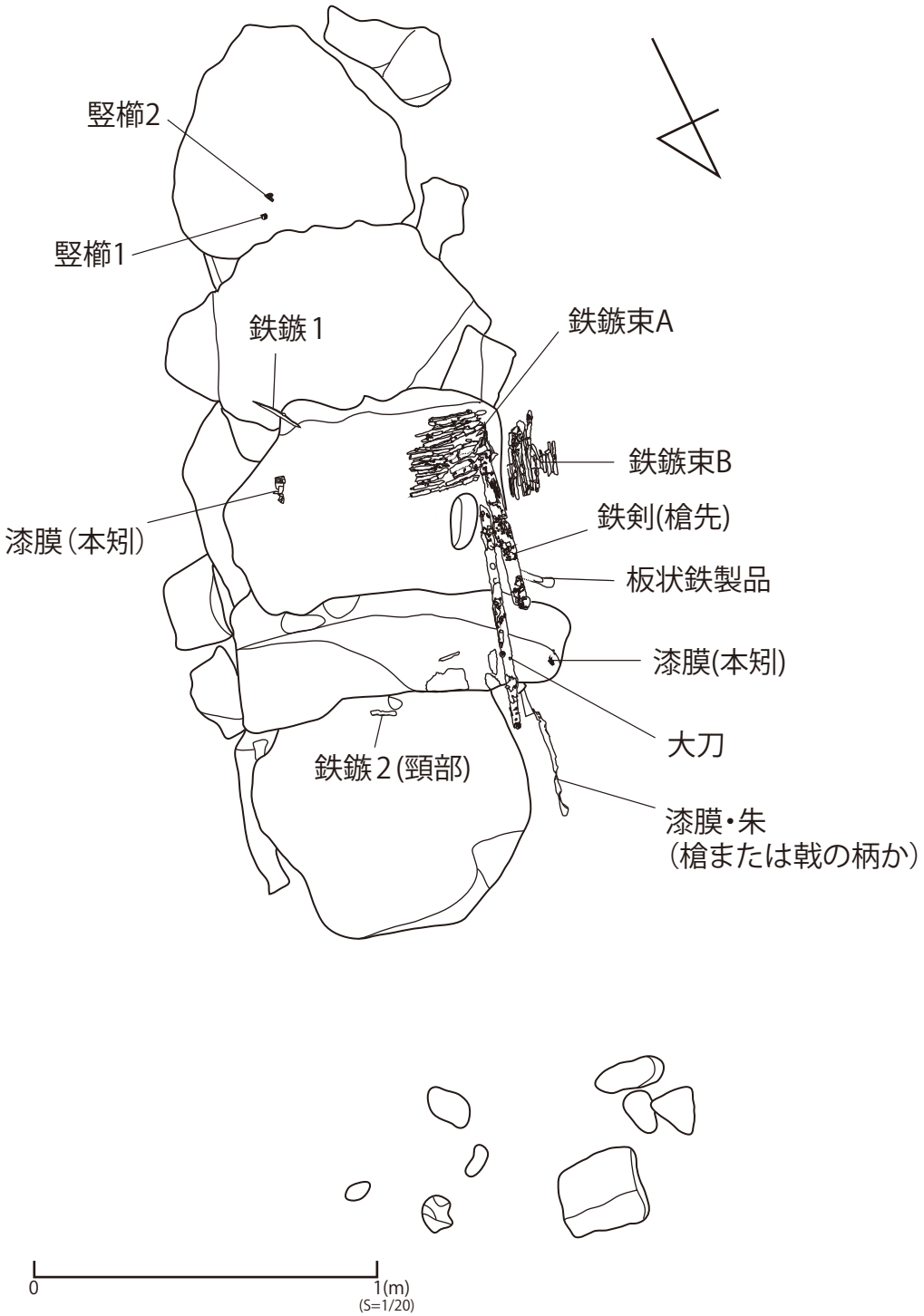
②　その他の出土遺物

石棺南端の蓋石上面から竪櫛 2 点が出土した。また、中央の蓋石の南東隅に立てかけられた形で鉄鏃（長頸鏃）が完形で出土した。口巻部分等は観察できず、鉄鏃単体の出土と判断した。石棺北端の蓋石南端から鉄鏃の頸部だけが出土した。第 2 主体部主軸と直交する位置である。周囲に他の部分は認められず、頸部だけが置かれたと考えられる。

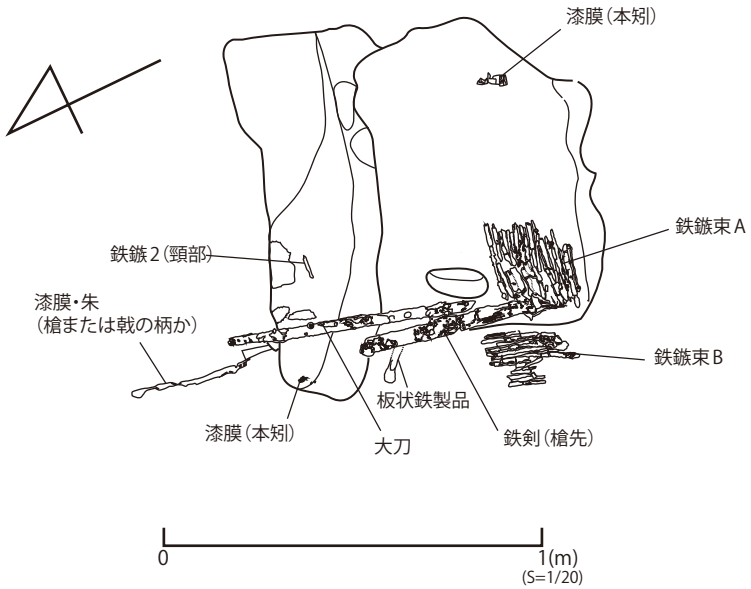
これらの出土遺物は被葬者の埋葬終了後蓋石が置かれた後に供えられた遺物群と考えられる。石棺蓋石西側から多量に出土した鉄製品との前後関係は不明である。

なお、残る管玉破片 1 点は石棺の隙を埋める粘土内から出土しており、死者への供え物と見ることはできない。　（横山　舞）

写真 34　石棺蓋石上面西側鉄製武器出土状況



第 14 図　遺物出土状況全体図



第 15 図　遺物出土状況詳細図

写真 35　本矧部分漆膜

写真 36　槍または戟の柄に残る漆膜と朱

竪櫛 1

竪櫛 2

写真 37　第 2 主体部竪櫛出土状況

写真 38　第 2 主体部鉄鏃出土状況

写真 39　第 2 主体部鉄鏃頸部出土状況

（4）　出土遺物

①　大刀

第 2 主体部石棺中央蓋石上から出土した大刀である。大刀は全長 62 cm を測る。身の長さ 51 cm、茎部の長さは 11 cm である。茎に目釘穴が一つ確認できる。身幅は最大で 2.5 cm、身の厚さは 1 cm。茎部の幅は 1.5 cm。である。柄部、刀身に木質が観察され、木装で鞘に収められていたと見られる。ふくら切っ先である。保存処理を実施できていないので、詳細な観察はできず、関部の形状等詳細は保存処理終了後に観察する予定である。実測図も現段階での作図であり、最終的な図は報告書作成段階で作成する予定である。

②　剣（槍先）

大刀と平行する位置置かれた剣（槍先）である。茎は本来の形を残しておらず、不整な形である。残された全長は 53 cm、身幅は最大で 4.5 cm を測る。剣身の両側に鎬があり、断面は菱形を呈している。断面の厚さは中央部で 1 cm あった。目釘穴の有無は確認できなかった。剣身部分には厚く木質が残されており、木製の鞘に入った状態と考えられた。

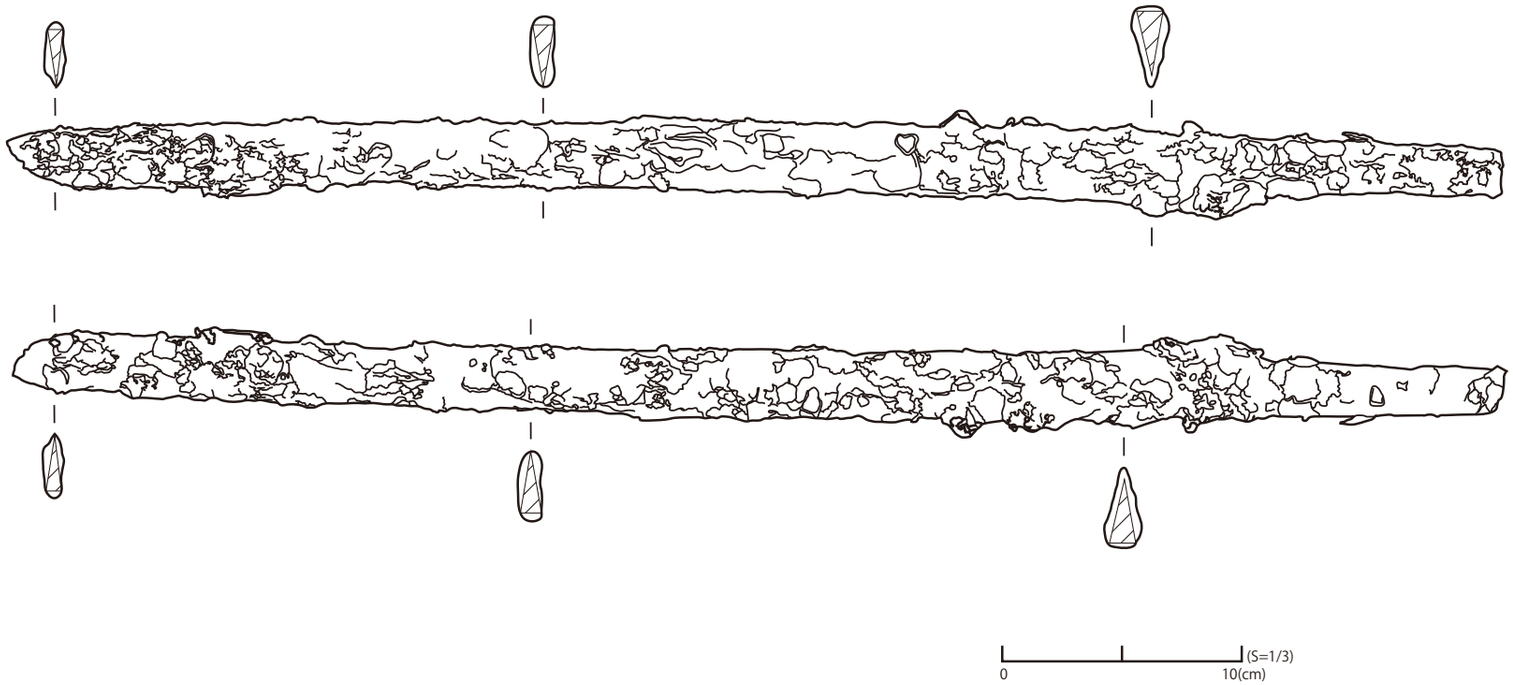
（斎藤千晶）

③　板状鉄製品

第 2 主体部西側から剣（槍先）に斜交する形で出土した鉄製品である。薄い板状の鉄製品で、長さ 14 cm、厚さ 1 cm を測る。幅は写真左で 2 cm で右にいくにつれて幅を増し、右端で 4.5 cm を測る。右側に大きな膨らみがあり、銹によるものと思われる。上下両端には面が作られており、特に刃を作り出した様子はない。左右両端は折れた状態で完結していない。先に述べたように ② と接合する可能性が高く、② と組み合って戟を構成するとも考えられるが、刃が作り出されておらず、疑問が残る。保存処理終了後に詳細観察を行い、検討したい。

写真 40　板状鉄製品

第 16 図　板状鉄製品　実測図



第 17 図　第 2 主体部出土大刀実測図

写真 41　第 2 主体部出土大刀

第 18 図　剣（槍先）実測図
（両面と断面）

写真 42　第 2 主体部出土剣（槍先）

④　鉄鏃束 A、B

A、B の 2 群鉄鏃の束が出土している。

束 A は第 2 主体部主軸に平行する方向で置かれた、鉄剣（槍先）の先端に乗った状態で、鏃先が主軸に直交する位置で発見された。束 A は塊の状態で正確に数は数えられないが、表面から観察するだけで 20 個体前後は確認できる。保存処理、整理作業が進めば 30 個体前後の個体が確認できると推測している。鏃の先端は西方向に向いて揃っており、鏃身も方向を揃えている。先に述べたように矢柄の本矧部分の漆膜の存在から矢の束として供えられた一群である。矢束を収容する靫や胡籙などの痕跡は確認できなかった。矢の束がむき出しで置かれていたと見られる。

鉄鏃は全て長頸鏃で、鏃身の形は柳葉形で長さ 2.5～3.5 cm 前後である。頸部は長さ 9.5～10 cm 前後、断面形は横に長い長方形である。茎は断面が円形で長さ 3～4 cm 程度を測る。茎は全て木質で覆われており、口巻きによって矢柄と接続していた様子がうかがえる。

束 B は鉄剣（槍先）よりも西側に、鉄剣と平行した状態で発見された。鏃先を南に向けた鉄鏃の束である。束 A と同じく固まりの状況だが、13 個体までは確認できる。全体では束 A と同様に 30 個体前後が束の状態で置かれたと推測される。鏃の先端は南方向に向いて揃っており、鏃身も方向を揃えている。矢柄本矧部分の漆膜の存在から矢の束として供えられた一群である。矢束を収容する靫や胡籙などの痕跡は確認できなかった。矢の束がむき出しで置かれていたと見られる。

鉄鏃は全て長頸鏃で、鏃身の形は柳葉形が原則だが、中に関で頸部との間に角が造り出されるものがある。全長 20 cm 前後である。頸部は長さ 13 cm 前後、断面形は横に長い長方形である。茎は断面が円形で長さ 3 cm 程度を測る。茎は全て木質で覆われており、口巻きによって矢柄と接続している。

（窪田麿実）

写真 43　鉄鏃束 A

写真 44　鉄鏃束 B

⑤　鉄鏃（単独出土）

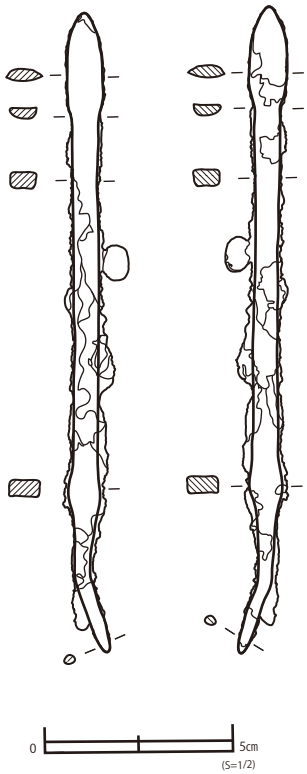
束で出土した A、B 群とは別に単独で出土した鉄鏃が 2 点ある。1 点は茎の下端を南から 2 枚目の蓋石にのせ、鏃身を中央の蓋石に立てかけるような形で出土した完形の鉄鏃（鉄鏃 1）で、もう一つは北端の蓋石の南端に主軸に直交する方向で頸部だけが置かれた（鉄鏃 2）ものである。

鉄鏃 1 は、全長 17cm、鏃身長さ 2.8 cm、頸部長さ 9.8 cm、茎部 4.4 cm を測る。鏃身は薄く、頸部断面は長方形、茎部断面は円形である。鉄鏃 1 は鏃身が小さく扁平で、鏃身関がナデ関であり、導入期の長頸鏃と思われる。また矢柄と鏃身を固定させるために糸や樹皮などで巻く「口巻き」部分は痕跡も含めて観察できず、鉄鏃単体で供えられていたと見られる。茎は中程から曲がっており、意図的に曲げられた可能性がある。

鉄鏃 2 は頸部だけが供えられていた。頸部の形状は鉄鏃 1 と共通しており、本来は同様の姿だったと考えられる。

（窪田麿実）

写真 45　鉄鏃 1



第 19 図　鉄鏃 1 実測図

⑥　竪櫛

第 2 主体部では、南側の石棺上部で小型の竪櫛を 2 点検出した。検出された竪櫛の詳細は以下の通りである。

竪櫛 1 は、棟幅約 1.6 cm、棟高約 1.5 cm を測り、黒漆の塗布が確認できる。中央部を結束する糸が明瞭に確認できるほか、歯も一部残存している。残存状況から、櫛の製作手順は、細く割いた竹の束の中央部を糸で縛り、そこを起点として折り曲げた後に、新たに幅 5 mm 程度まで同じく細く割いた竹で帯状に縛ったものと推測され、仕上げとして黒漆を用いたことが分かる。

竪櫛 2 は、棟幅約 2.5 cm、棟高約 1.9 cm を測る。こちらも黒漆の塗布が認められ、櫛歯は残存しない。竪櫛 1 とは異なり、中央部を結束する糸と巻縛部は確認できない。したがって、竹の束の中央部を糸で縛ることはせずに折り曲げて製作されたことは分かるが、その後の処理方法については資料の残存状況から判断することは不可能である。

製作手順の異なる 2 点の竪櫛がほぼ同じ場所で検出された理由は定かではない。ただし、第 1 主体部で検出された一部の竪櫛は重なり合っているのに対し、第 2 主体部で検出された 2 点は重なり合う状況では副葬されていなかった。

（横山　舞）

写真 46　竪櫛 1，2 写真

第 20 図　竪櫛 1，2 実測図

3　墳丘上に築かれた塚状遺構からの出土遺物

灰塚山古墳後円部墳頂に礫石経柄が営まれていたことはこれまでの調査報告で述べてきた（辻他　2013、2014）。礫石経塚の調査は第 4 次調査で終了したが、後円部墳頂に残された樹木の根に護られる形で礫石経塚を構成する礫と土が一部残されていた。今回の調査にあたり、このような木を一部伐採したため、残されていた礫石経塚の礫と土を除去した。礫の掘りあげにあたり、慎重に観察したところ、以下の墨書礫を発見した。礫は比較的小型の川原石で、特徴はこれまでに報告した墨書礫と共通していた。

NO.1

NO.2

NO.3

NO.4

NO.5

NO.6

NO7

NO8 表

NO8　裏

NO.9

NO １０

NO １１

NO12　表

NO12　裏

写真 47　墨書礫

第 3 章　考　　察

1　第 1 主体部

第 1 主体部は古墳の主軸上に位置し、長さ 8 m を越える規模からみても灰塚山古墳の主たる埋葬施設だと考えられる。灰塚山古墳の全長 60 m を越える墳丘はまさにこの第 1 主体部の被葬者のために築かれたといえよう。

①　埋葬施設

掘り下げ当初の段階で粘土槨を想定していたが、粘土槨の天井部とみていた白色粘土の広がりの上面から遺物が出土しはじめ、木棺痕跡の床面に相当することが判明した。

白色粘土は西側面から東側面下端まで延びているが､側面はシルト質の土で構成される。白色粘土は西側面から床面、東側面の下部まで伸びているだけであり、木棺が置かれる前の段階で木棺の形、規模に合わせて設置された粘土床と見ることができよう。従って第 1 主体部は側壁を持つ粘土床に木棺を直葬した施設といえよう。会津大津山古墳出土南棺、北棺（伊東、伊藤　1964）、本屋敷 1 号墳後方部木棺痕跡（伊藤他　1985）など木棺直葬で両端部を粘土で押さえる構造（第 21 図 1～3）とは異なっているが、粘土で全面を密封する粘土槨の簡略形と理解することができるかもしれない。

福島県郡山市大安場古墳の埋葬施設は残念ながら埋葬施設の上部が削平されてしまっているため、全容は知り得ないが、報文によれば（柳沼他　1998）棺内の堆積土には白色粘土は見られず、木棺上を粘土で被覆することはなかったと考えられている。粘土床を構築し、その上に木棺を安置する構造は、灰塚山古墳第 1 主体部によく似ており、類似の施設である可能性を考えさせる（第 21 図 5）。

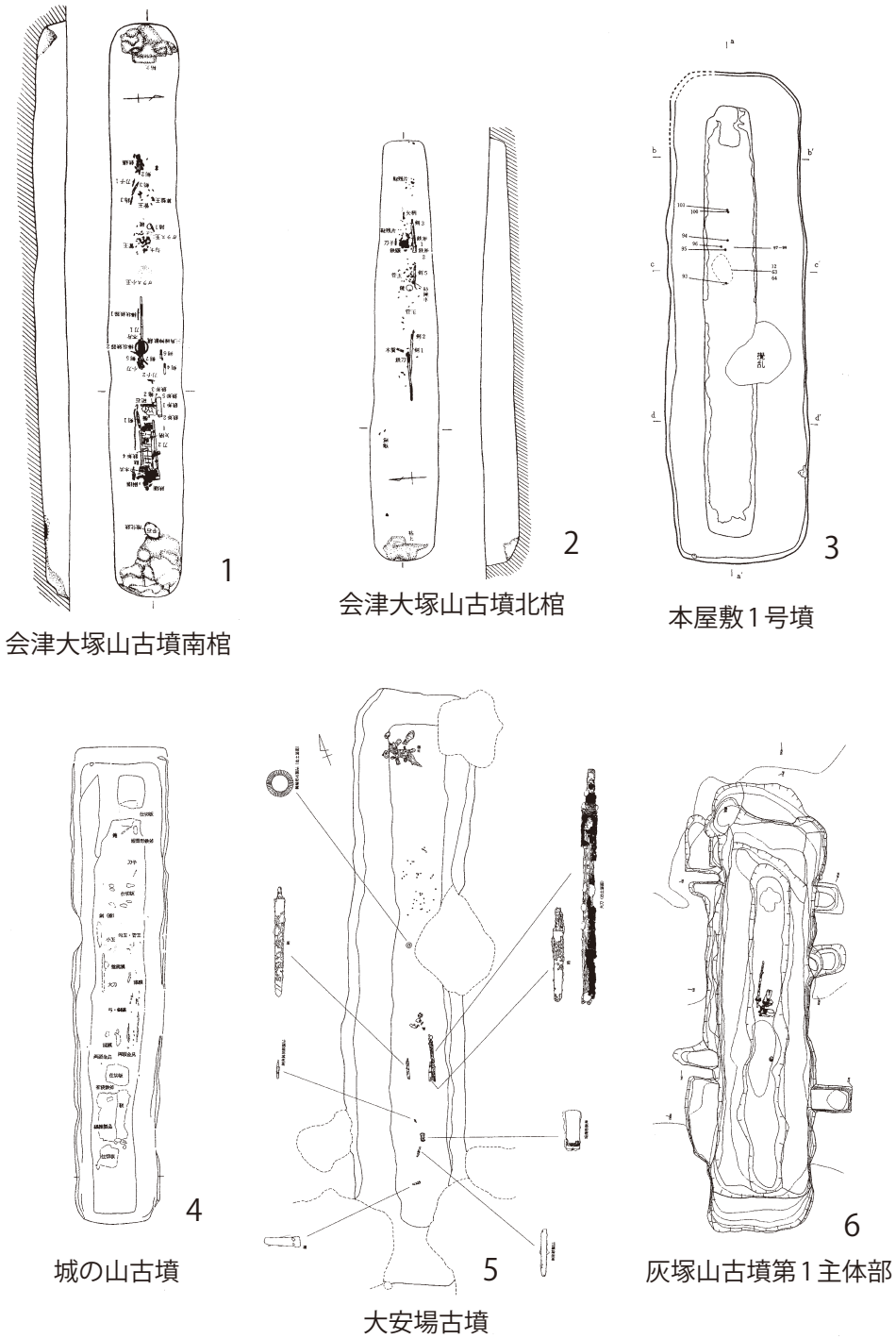
次に木棺の構造を考えてみたい。

全長 8.3 m、幅は 1.7 m を測り、全体の平面形は長方形に近い。大型の木棺である。横断面は第 3 図に示したように側壁は垂直に近い角度で立ち上がり、底面は平らである。底面中央のくぼみは排水のための施設で木棺の形状を反映していないと見られる。南北の端はなだらかな斜面になっており、幅を減じることはない。

長方形を呈する木棺平面形、規模は新潟県胎内市城の山古墳の埋葬施設（水澤他 2016）に近い。しかし、城の山古墳埋葬施設は底面が緩やかな弧を描き、刳りぬき式の舟形木棺と考えられている。しかし、灰塚山古墳第 1 主体部は横断面が箱形で、刳りぬき式と考えるのは難しい。

横断面形状から、第 1 主体部は組合せ式木棺と考えたい。箱形の中央部が南北両端の緩やかな立ち上がりに接続する形で、南北両端は舳先と艫を思わせ、全体は船の形を想起させる。古墳時代の準構造船に近い形状を想定したい。

今回の調査では、木棺の下部にある粘土層の構造、排水施設等については十分に追求することができなかった。今後の課題としたい。



第 21 図　木棺直葬埋葬施設比較図

② 第 1 主体部の時期

第 1 主体部の時期を考える手がかりは出土小型仿製鏡、腕飾り（ガラス玉）、竪櫛、大刀であるが、ガラス玉は成分分析を実施しておらず、大刀は保存処理前であるため十分に検討できる状況にはない。総合的な時期の検討は今後の課題として、ここでは仿製鏡、竪櫛から可能な範囲で第 1 主体部の時期を検討したい。

小型仿製鏡の文様は調査段階で珠文鏡かと見られたが、その後鏡背面の文様が明確になり、内区に不揃いな盛り上がりが展開することが判明した。森下章司氏から、内区の文様は獣像が変化したもので、分離式神獣鏡系（森下　1991）に入るものとのご教示を受けた。内区の文様を獣像の可能性を念頭に観察すると、文様には直径 5 mm 程の円形のものから 8 mm の楕円形のもの、さらにその楕円形と円形が接着しくびれを持った形状のものが確認できる。さらにそれらが配される地の面には、細長い形状のわずかな突起も数箇所確認できる。楕円形の盛り上がりは獣像との関係はわからないが、くびれを持つ形状の盛り上がりには尾かと思われる細長い盛り上がりが接続しており、獣像と見ることが可能と判断された。文様部分が紐痕跡や布で覆われている部分を除いて、獣像は 2 個観察できる。現状では神像は確認できないので、現段階ではこの鏡を「獣文鏡」と読んでおきたい。

獣文鏡は外区、内区の文様構成を含めて森下氏の分離式神獣鏡系の鏡である。この系列は 4 世紀末に登場し、5 世紀前半まで存続すると考えられている。第 1 主体部出土獣文鏡はこの範囲で位置づけることが可能である。森下氏から本鏡を 5 世紀に前半に位置づけて問題がないとのご教示をいただいたことをうけて、ここでは 5 世紀前半に位置づけておきたい。

第 1 主体から出土した竪櫛群は、40 個体を越えており、大量に出土した点が特徴的である。また、次項で述べるように大型の竪櫛には棒状突起があり、その先に小型の竪櫛が取り付けられることも大きな特色である。

川村雪絵氏による集成では（川村　1999）、古墳からの竪櫛出土例は 144 例を数えるという。集成後の発見、追加例を加えれば全国で 150 基以上の古墳から竪櫛が出土していることになろう。竪櫛出土古墳の時期は古墳時代前期後半ないし末から中期にいたり、後期には残らないという。竪櫛を出土した古墳の埋葬施設を川村氏の集成によって検討すると、一部の例外を除けばほとんどが竪穴系の埋葬施設であり、竪櫛副葬古墳の時期が古墳時代前期後半ないし末から中期までという指摘は妥当であることが分かる。竪櫛の出土数は 10 個未満が多いが、30 個を越える多量埋納 14 例を数え、中には 150 個体の出土例も報告されている。

石川県能美市下開発茶臼山古墳群第 9 号墳第 1 主体部から 50 個体、第 2 主体部から約 125 個体が出土している。人体埋葬に伴う竪櫛群の中で 125 個体は最多例である（三浦他 2004）。出土竪櫛群の検討を行った三浦、長屋の両氏は、竪櫛 40 個体以上を出土した古墳 16 例を集成し、竪櫛の多量副葬された古墳は中期初頭から中期後葉に限られていること

と、帯金式甲冑が共伴する割合が高いことを指摘した（三浦、長屋　2004）。

また、大型と小型の櫛を組み合わせて葬具とする例は京都府宇治市宇治二子山古墳北墳西槨（杉本他　1991）、兵庫県朝来群和田山町茶すり山古墳第2主体部（岸本他　2003）等から出土しており、いずれも古墳時代中期中葉に位置づけられている。

以上の諸例から灰塚山古墳第1主体部竪櫛群は5世紀前半から中葉に位置づけられる。

第1主体部の時期は出土鏡、竪櫛群の検討から現状では5世紀前半から中葉と考えておきたい。（辻　秀人）

2　第2主体部

第2主体部は調査当初、木棺が粘土槨で覆われた埋葬施設か、古墳の主たる被葬者と推測されている第1主体部の被葬者への供物を納めた施設の可能性が考えられた。しかし、調査を進めていく過程で、第2主体部は石棺上部を石組みで覆い、その上をさらに粘土で密閉するという構造をもった埋葬施設であることが判明した。

①　埋葬施設の構造

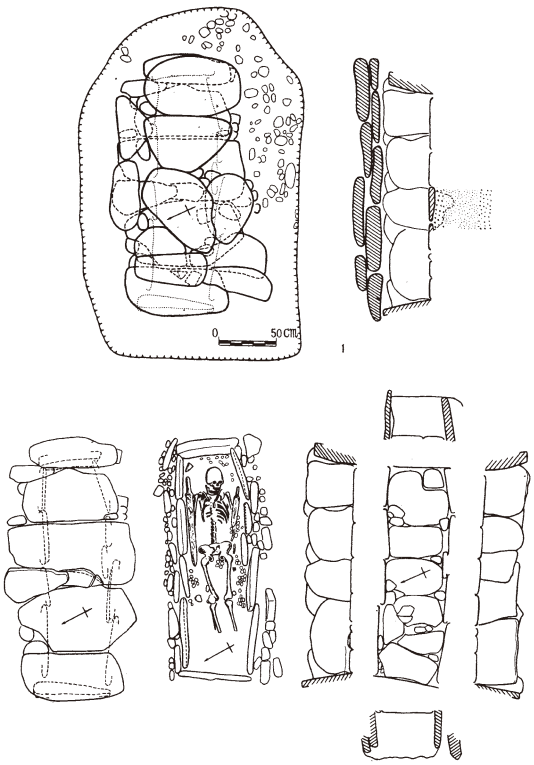
調査の現段階で第2主体部の構造をまとめると、埋葬部は板石を組み合わせて構築した石棺で、その上を板石を組み合わせた石組み遺構で覆い、さらに最上部を厚さ20～30 cmの粘土で覆って密封する構造であった。未調査だが、石棺の周囲は粘土が充填されている様子が観察できる。きわめて厳重で、石棺を石組みと粘土で二重に覆う、いわば石棺の粘土槨とも言うべき構造を持っている。

このような構造の箱式石棺は少なくとも東北地方には類例がない。

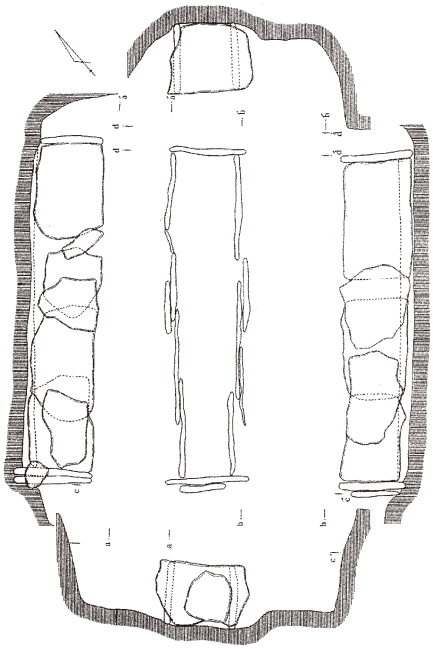
東北地方ではこれまで多くの箱式石棺が出土しているが、多くは福島県浪江町本屋敷3号墳（第22図3）のように箱式石棺を墓壙内に直接据え付けるものである。

中で、第22図1に示した浪江町上の原3号墳1号石棺は二つの点で類似した要素を持つ。一つは棺の上面に粘土の被覆粘土が確認されていることである。報告文（伊東　1979）によれば「粘土は蓋石上面に貼られていた」とのことである。もう一つの類似要素は石棺の蓋石が二重になっている点である。「蓋石は二重であるが、下石は6枚で石室の上にかけられ、その隙間を覆うように6枚の上石置かれ」ている。

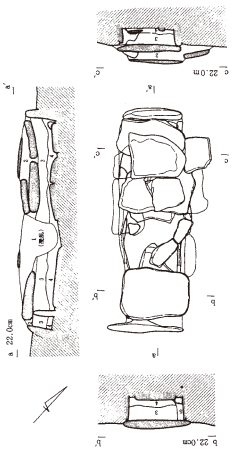
上の原3号墳1号石棺は蓋石を覆う粘土の存在と蓋石の上にさらに石を重ねる構造に灰塚山古墳第2主体部との共通点が見られる一方、粘土の覆いは蓋石上だけに限られるようであり、蓋石の二重構造も蓋石部分にとどまり、灰塚山古墳第2主体部とは完全に同じ構造とは言えない。ただし、石棺を粘土と板石の二重構造で保護する意識には共通する意識を見ることができるように思われる。なお、詳細な図面は公表されていないが、会津坂下町長井前ノ山古墳では石棺の合掌状をなす天井石を覆って「粘土及大小の川原石と角礫によって棺全体がカマボコ形に被覆され」ていると報告されている（菊地　2002）。長井前ノ山古墳例は灰塚山古墳第2主体部により近いのかもしれない。ただし、灰塚山古墳例と同様に棺側壁の外側に粘土が及ぶかどうか今後の報告に待ちたい。



1. 浪江町上の原 3 号墳（伊東 1979）



2. 山形市大之越古墳 2 号棺
（川崎、野尻、横戸 1979）



3. 本屋敷 3 号墳（伊藤他 1975）

石組み遺構　　石棺

4. 灰塚山古墳第 2 主体部

第 22 図　箱式石棺石棺比較図

②　埋葬後の供献儀礼

石棺の蓋石の上から多量の鉄製武器と竪櫛が出土した。すでに述べたように、石棺中央蓋石西側付近にはまず、大刀と鉄剣（槍、戟?）が置かれ、次に石棺主軸方向に直交して30本程度からなる矢の束と、主軸に平行方向で同じく30本程度の矢の束が置かれる。また前後関係は不明だが、石棺の南端蓋石の上に竪櫛2点が、中央蓋石の南東隅に鉄鏃1点、北端蓋石の南よりに鉄鏃頸部1点が主軸と直交して置かれている。多くの鉄製武器が出土した石棺中央蓋石は、石の重なりから見て最後に置かれており、被葬者の遺体が見えなくなった段階で意識的に置かれたと見られる。

このような状況から見て、多量の武器と竪櫛は被葬者を石棺に埋葬終了後に行われた供献の儀式で使われ、残されたと考えられる。粘土と蓋石で厳重に保護され、内側を朱彩された石棺の様相も合わせ考えると、これらは死せる王者を武力と竪櫛の霊力を持って寄り来たる悪霊から被葬者を護るという「僻邪」の思想を具体的に実現したものと考えられよう。

遺体の埋葬時に儀式が執り行われていることはこれまでの調査例から知られているが、埋葬後の儀式の存在を明確に示す例は寡聞にして知らない。少なくとも東北地方では初めての確認例だろう。今後全国的に類例を検討する必要がある。

ところで、山形市大之古墳2号棺（第22図2）蓋石上から剣菱形杏葉等馬具、帯飾金具が出土している（川崎、野尻、横戸　1979）。これらの出土状態が不明であることや、出土したのが馬具を中心とする遺物群であることなど、灰塚山古墳第2主体部例と同様に見ることが可能か否か今後検討する必要があろう。

③　第2主体部の時期

第2主体部の時期を考える材料は、第1主体部との前後関係、埋葬施設の検討、出土遺物の所属時期である。

まず、第1主体部と墓壙の切り合い関係があり、第2主体部が新しいことが判明している。第1主体部は先述したように5世紀前半から中葉と考えられた。また、東北地方では箱式石棺を埋葬施設とする古墳の所属時期はおおよそ5世紀から6世紀にかけてである。

次に出土遺物では鉄鏃の編年研究が進んでおり、年代を考えることが可能である。第2主体部から出土した鉄鏃はいずれもナデ関をもつ長頸鏃で、水野敏典氏編年で中期第3段階（水野　2013）に位置づけられよう。

以上を総合して、第2主体部は第1主体部に後続し、5世紀中葉から後半の時期に位置づけられよう。

④　今後の課題

今回の調査は、第2主体部石棺蓋石の上面までにとどまった。来年度の調査では、石棺の蓋石を取り上げ、石棺内部の様相を明らかにする予定である。今回の調査では石棺据え方や充填粘土の範囲も不確定であるため、今後は墓壙ライン、石棺据え方、充填粘土の範囲を確定させ、最終的には第2主体部の構築手順も明らかにしていきたい。　（横山　舞）

3　墳丘

灰塚山古墳は、測量調査、第 1 次調査の成果から（福島県博　1987、辻他　2012）、南北方向の丘陵を整形し、その上に盛り土をして築かれた前方後円墳であることが判明している。全長 61.2 m、後円部直径 33.2 m、後円部高 5 m、前方部長さ 27.6 m、前方部前端幅 23 m を測る。調査前には丘陵頂部にある立地、墳丘の構築方法、前方部が比較的長く、前端幅が狭い形状などを総合して、灰塚山古墳は前期古墳の可能性が高いと考えていた。また、前方部高さは 4 m で、前方部が高い特徴があると見ていた。

しかし、前項までの検討で、灰塚山古墳では 5 世紀前半ないし中葉に主たる埋葬が行われ、5 世紀後半にも新たな埋葬が行われていることが判明した。いずれの埋葬部も墳頂平坦面からさほど深い位置にはないことを考慮すると、下層に埋葬部の存在する余地もなしとはしないが、まずは中期古墳と考えることができよう。改めて灰塚山古墳をこれまで知られている中期古墳との比較をしてみたい。

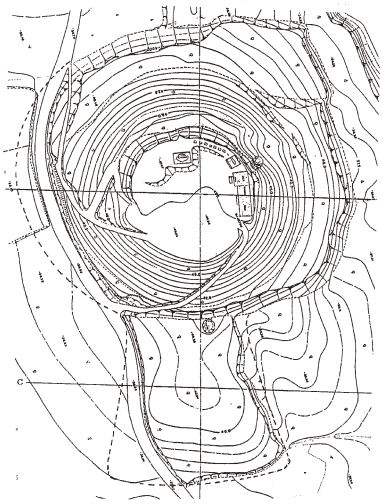
東北地方では前期に比べて中期に大型古墳の築造は少ない。特に中期前半に位置づけられる古墳はわずかで（辻　2011）、浪江町堂の森古墳（福島県博　1987）、南相馬市太田前田古墳、会津坂下町長井前ノ山古墳（菊地　2002）などを挙げうるに過ぎない。これらはいずれも全長 30 m を越える程度の前方後円墳である。灰塚山古墳の築造年代を 5 世紀前半とすれば、この時期の東北地方最大の前方後円墳といえよう。

中期後半に至り、東北地方では 40 m を越える比較的大型の前方後円墳が広く築かれるとともに、大型古墳の周囲に円墳で構成される古墳群が数多く出現する。

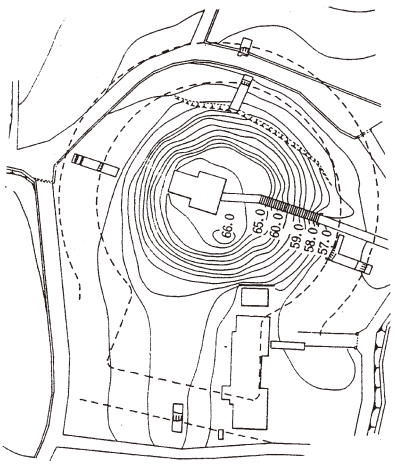
第 23 図に示したように、中期後半の最大規模の前方後円墳は宮城県名取市名取大塚山古墳（恵美、菅井　1990）で、全長 90 m を測る。他に全長 50 m を越える大型古墳には宮城県色麻町念南寺古墳全長 56 m（古川、高橋　1998）、仙台市兜塚古墳全長 72 m（手塚、加藤　1989）、白石市瓶が盛古墳全長 56 m（白石市教委、1972）福島県国見町国見八幡塚古墳全長 66～68 m（国見町　1977）、山形県山形市菅沢 2 号墳（柏倉、阿子島、加藤、江川　1987）円墳直径 50 m がある。第 2 主体部が営まれた 5 世紀後半段階では灰塚山古墳は東北地方で第 4 位の大型古墳になる。

この時期の大型墳は全体的に前方部が短く、小さい傾向があり、前方部が極端に低く、後円部との比高差が大きいタイプ（名取大塚山古墳、念南寺古墳、裏町古墳、瓶ヶ盛古墳、角塚古墳等）と前方部が短く、盾形周溝を持つ帆立貝式古墳（兜塚古墳、国見八幡塚古墳、福島市八幡塚古墳等）がある。また、多くの古墳に窯で焼成された埴輪が伴い、当時の最新の土器である須恵器が出土する例も多い。内部主体が判明している古墳は少ないが、念南寺古墳では家形石棺が用いられ、裏町古墳では川原石積竪穴石室が採用されている。

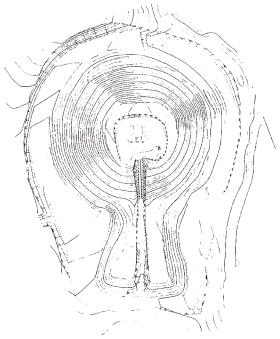
以上のような東北地方の中期古墳の類例と比較すると、灰塚山古墳は墳丘形態では中期古墳と類似する要素は少なく、前期古墳との共通性が認められる。埋葬施設では第 1 主体部の長大な木棺直葬の類例はなく、第 2 主体部の石棺は大型古墳ではなく、小型の円墳な



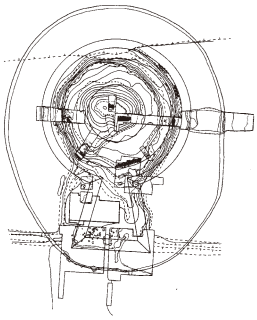
1.　名取大塚山古墳（恵美、菅井 1990）



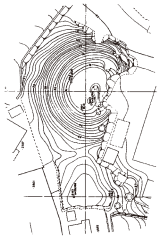
2.　国見八幡塚古墳（国見町 1977）



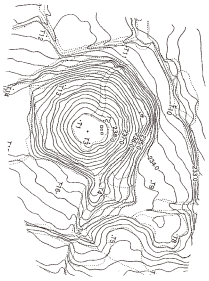
3.　念南寺古墳
（古川、髙橋 1998）



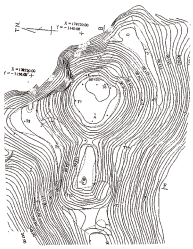
4.　角塚古墳
（朴沢他 2002）



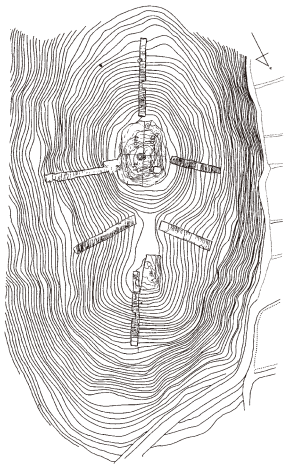
5.　裏町古墳
（岩渕他 1974）



6.　庚申壇古墳
（菊地他 2008）



7.　長井前ノ山古墳
（菊地 2002）



8.　灰塚山古墳

第 23 図　東北地方中期古墳比較図

どに採用される箱式石棺に類似する要素がある。

灰塚山古墳の墳丘形態を従来の中期古墳に系譜を求めることは困難で、今後その位置づけを追求する必要がある。

（辻　秀人）

4　小型仿製鏡の位置づけ

灰塚山古墳第 1 主体部出土鏡は、森下氏分類の分離式神獣鏡の系列に属する鏡だと考えられた。ここでは東北地方の古墳から出土した小型仿製鏡を概観し、灰塚山古墳出土鏡の位置づけを考えてみたい。

第 2 表は東北地方出土小型仿製鏡の集成である。出土が不明瞭である例もあるが、おおむね小型仿製鏡の出土状況を把握することができる。

第 2 表によれば古墳時代前期の確実な遺構からは珠文鏡 4 面、内行花文鏡 3 面が出土している。また、中期古墳では、重圏文鏡 1，乳文鏡 1、珠文鏡 1、内行花文鏡 1，獣形鏡 1、捩文鏡が出土している。前期、中期を通して珠文鏡 5 が最も多く、次いで内行花文鏡 4 が出土している。

灰塚山古墳第 1 主体部出土鏡はかなり変形された獣文が主文様である。東北地方出土鏡の中にも獣像をモチーフとするお花山 22 号墳出土獣形鏡（渋谷、長橋　1985）、会津大塚山古墳南棺出土四獣鏡（伊東、伊藤　1964）があるが、いずれも灰塚山古墳出土鏡とは主文の形状、圏線と内外区の文様構成に大きな違いがあるなど、文様の系譜を異にしており直接の関係を見いだすことができない。

灰塚山古墳出土鏡は東北地方で比較的多い珠文鏡、内行花文鏡とは親縁関係を認めることは困難である。

森下章司氏のご教示によれば分離式神獣鏡系列は、宮崎県下北方 5 号地下式横穴、三重県二ノ谷古墳、岐阜県龍門寺 15 号墳などに類例があり、この系列の類例の多くは西日本に分布しているという。

以上のような状況を踏まえて、今後視野を広げて類例を検索し、入手経路についても新たな検討が必要となるだろう。

（鈴木舞香）

東北地方古墳時代鏡　集成

No	県名	遺跡名（発見場所）	所在	鏡式名	直径	種類
1	岩手	五郎屋敷	金ヶ崎村	五鈴鏡	8.5	小型？製鏡
2		上根子熊堂古墳	花巻市	五鈴鏡		？製鏡
3	宮城	日光山古墳群	大崎市	変形鋸歯文鏡（四獣形鏡）	7.3	小型？製鏡
4		香取神社境内（御山古墳）	色麻市	重圏文鏡？	6.7	
5		裏町古墳	仙台市	乳文鏡（珠文鏡）	9.1	小型？製鏡
7		吉ノ内 1 号墳第 1 主体	角田市	捩文鏡	7.5	
8		狐塚古墳	丸森町	六鈴六獣形鏡	10.8	
9		台町 20 号墳	丸森町	六鈴七獣鏡	10.5	小型？製鏡
10				六狐内行花文鏡	11.2	
11		入の沢遺跡	栗原市	珠文鏡	5.6	小型？製鏡
12				珠文鏡（区画入り）	8.2	小型？製鏡
13				内行花文鏡	9	小型？製鏡
14				重圏文鏡（櫛歯文鏡）	5.5	小型？製鏡
		郡山遺跡	仙台市	不明	9	
15	山形	お花山 1 号墳 1 号棺	山形市	捩文鏡	9.5	
16		お花山 22 号墳	山形市	獣形鏡（捩文鏡）	9	
17		馬洗場 B 遺跡	山形市	内行花文鏡	8.2	小型？製鏡
18		下小松古墳群薬師沢支群 第 143 号墳	川西町	鋸歯文鏡	4.9	
19	福島	会津大塚山古墳（南棺）	会津若松市	変形四獣鏡	9.5	小型？製鏡
20		会津大塚山古墳（北棺）	会津若松市	捩文鏡	10.3	小型？製鏡
21		会津田村山古墳群（糠塚古墳）	会津若松市	内行花文鏡	11.2	小型？製鏡
22		会津田村山古墳群（灰塚古墳）	会津若松市	内行花文鏡	9.8	小型？製鏡
23		青木鏡塚古墳	会津若松市	（不明）		
24		土橋古墳	伊達市	珠文鏡	7.3	
25		愛宕山古墳（愛宕塚古墳）（伝）	本宮市	五鈴鏡	13	？製鏡
26		会津坂下町（伝）	会津坂下町	珠文鏡	8.5	小型？製鏡
27		森北 1 号墳	会津坂下町	珠文鏡（放射状区画珠文鏡）	8.4	小型？製鏡
28		表西山横穴古墳群 30 号横穴	相馬市	珠文鏡（乳文鏡）	破鏡	
29		中田 1 号横穴前庭部壇	いわき市	珠文鏡	6.4	小型？製鏡
30		横山台古墳	いわき市	四鈴鏡	6.1	
31		高阪（坂？）古墳 2 号墳	いわき市	鈴鏡		
32		いわき市横穴	いわき市	五鈴鏡	径 2 寸 8 分	？製鏡
33		上平野・富岡横山古墳群	いわき市	五鈴鏡	8.5	小型？製鏡
34		高野峰山祭祀遺跡	白河市	珠文鏡	4.6	小型？製鏡
35		石川町（伝）	石川町	五鈴鏡	13	？製鏡
36		桜井古墳群上渋佐支群 7 号墳	原町市	珠文鏡（二重）	8.7	小型？製鏡
37		塚之目古墳	国見町	素文鏡		？製鏡
38		灰塚山古墳	喜多方市	珠文鏡	9.0	小型？製鏡
39		山崎横穴古墳	喜多方市	珠文鏡？		
40				（不明）		
41		飯尾町鏡塚古墳	飯尾町	（不明）		
42		十五壇原古墳	高田町	（不明）		

第 2 表　東北地方古墳時代小型仿製鏡一覧

参考文献：『日本における古鏡発見地名表』（東北地方）福岡　1977
『倭製鏡一覧』立命館大学考古学論集刊行会　2011
『桜井古墳群上渋佐支群 7 号墳発掘調査報告書』原町市教育委員会　2001
『会津田村山古墳』田村山古墳周溝調査報告刊行会　1981

5　竪櫛を用いる埋葬儀礼について

第 1 主体部で出土した竪櫛群は総数 50 点を越え、遺存状態がきわめて良好である。また、大型、小型の竪櫛が組み合わせて使われた様子が観察され、その組合せ構造を知ることができる希有な資料でもある。

ここでは大小の竪櫛を組み合わせた葬具の構造を復元し、次ぎに葬具を用いて行われた葬送儀礼について考えてみたい。

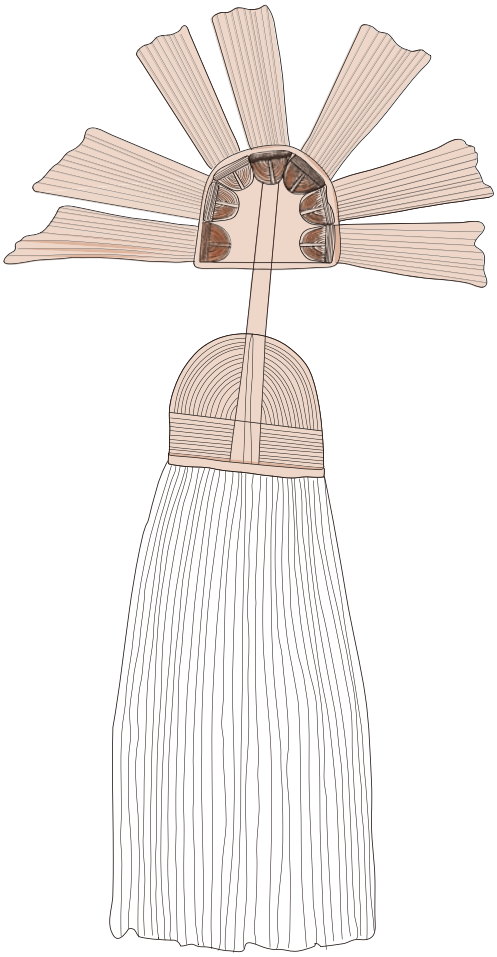
(1)　竪櫛組み合わせ葬具復元

竪櫛の中には「棒状突起」を持ち、小型櫛と組み合わせて葬送の道具として用いられることがあることが川村雪絵氏により指摘されている（川村　1999）。また、京都府宇治二子山古墳（杉本他　1991）、兵庫県茶すり山古墳（岸本他　2003）、長野県七瀬 3 号墳第 2 主体部（滝沢他　1989）等では大小竪櫛を組み合わせた葬具の一部が確認されている。

灰塚山古墳第 1 主体部出土例では、大小竪櫛の構成及び位置関係は明瞭であるが、棒状突起と小型竪櫛群との連結構造が不明瞭であったため、上記の出土例を参考に連結構造を補った上で葬具の復元を行った（第 24 図）。

第 24 図は第 1 主体部で発見された竪櫛群の中で最後に置かれた資料から復元した全長 20 cm、棟部 4.5 cm、櫛歯長さ 15.5 cm を測る大型櫛に棟部中央に棒状突起を加えたものである。突起の先に横棒と弓状に湾曲する棒を組み合わせ、湾曲する棒に 7 個の小型櫛をくくりつけた姿である。小型櫛は全長 6 cm、棟部 1 cm、櫛歯長さ 5 cm を測る。くくりつけられる小型櫛の数は 6 個の例もあるが、本例もふくめ、多くは 7 個であるようだ。葬具全体は全長 31 cm、最大幅は 16 cm を測る。

第 24 図では、復元で使用した出土例が赤漆で彩色してあるために朱彩で表現したが、他は黒漆塗りであり、特殊な例であるかもしれない。



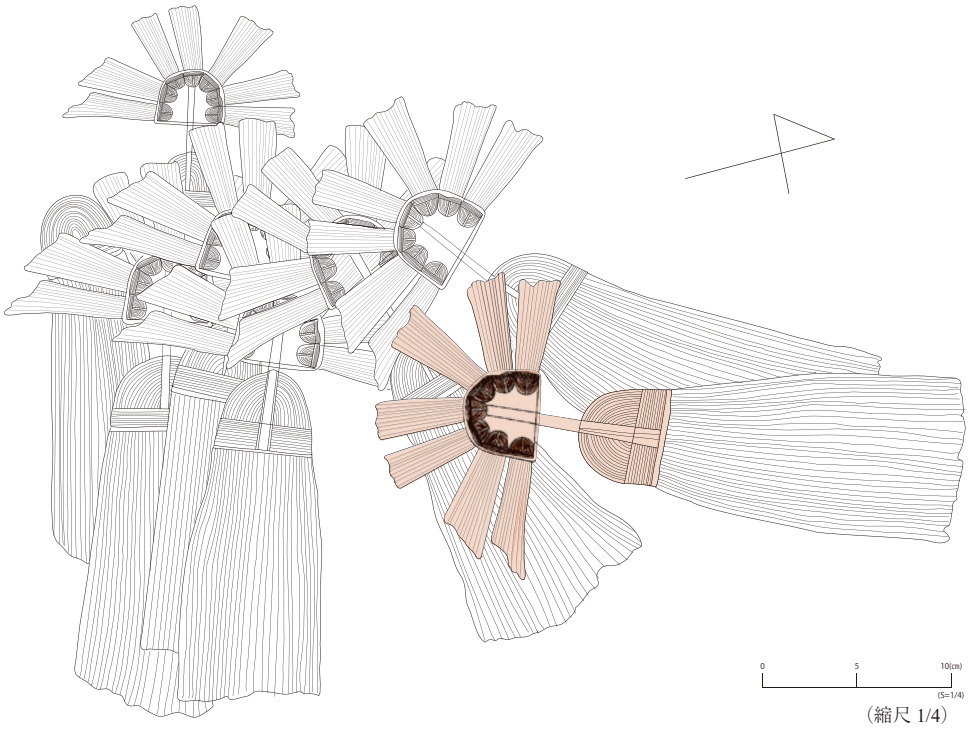
第 24 図　竪櫛組み合わせ葬具復元

（2）　灰塚山古墳第 1 主体部竪櫛群供献状況の復元

灰塚山古墳第 1 主体部で出土した竪櫛群は、ある程度大型竪櫛と小型竪櫛との関係が想定できる状況にある。しかし、相互に重複関係にあることや、小型竪櫛の位置に乱れがあることから正確な組み合わせ関係には不明なところも多い。

ここでは、前項で復元した葬具の姿をもとに第 1 主体部出土された竪櫛群がどのような姿で供献されたのか復元を試みた。ただし、関係性の不明なものに関しては図面には載せていない。

第 25 図に示したように、灰塚山古墳第 1 主体部出土竪櫛群には、少なくとも 6 個体の棒状突起を持つ大型竪櫛があり、これらがすべて小型竪櫛と組み合わせて葬具として用いられていたことが分かる。ただし、連結する小型竪櫛群は 7 単位存在し、調査途中で出土した大型竪櫛があることから本来は 7 個の葬具があった可能性が高い。葬具 1 単位は大型竪櫛 1、小型竪櫛 7 で構成されるため、第 1 主体部には最大で、最初に置かれた単独の大型竪櫛 1 と 8 個の葬具（竪櫛 64）で合計 65 個の竪櫛が供献されていたとみることができる。



（縮尺 1/4）

第 25 図　竪櫛供献状態復元

(3)　供献埋納のプロセス

第 25 図に明らかなように、各個体には上下関係があり、供献された順番を知ることができる。そのプロセスを第 26 図に示した。

① 最下層は南側の単独の竪櫛 1 である。最初に棟を西に向け、遺体に直交する方向に置かれる。棟部は棺のほぼ中央付近にあたる。

② やや北にずれた位置で大型櫛の櫛歯の端が単独の大型櫛にややかかる位置に葬具 2 を置く、大型櫛の棟の上部はやや西側にずれる。葬具 2 の方向は単独竪櫛 1 とほぼ同じ方向である。

③ 葬具 3 を単独竪櫛 1 と葬具 2 の間の位置に置く。小型竪櫛連結部が単独竪櫛棟部よりやや東側に位置し、葬具全体は東側に寄る位置に置かれる。方向は葬具 2 とほぼ揃えている。

④ 葬具 4 を葬具 3 よりもやや北、と東にずらした位置に置く。小型竪櫛連結部一つ分西にずらして置かれる。方向は葬具 3 とほぼ揃えている。

⑤ 葬具 5 を葬具 4 よりもやや北、東にずらした位置に置く、大型竪櫛の棟部は葬具 3 よりもわずかに東側にずらしている。方向は葬具 4 とほぼ揃えている。

⑥ 葬具 6 を葬具 5 の北側に置く。葬具 5 とは小型竪櫛連結部の櫛歯部分がわずかに重複し、前後関係は分かるが、大きな重複はない。方向は葬具 2〜5 に対して東で 20 度前後北に振れている。棟部の先端は南西に近い方向に向く。

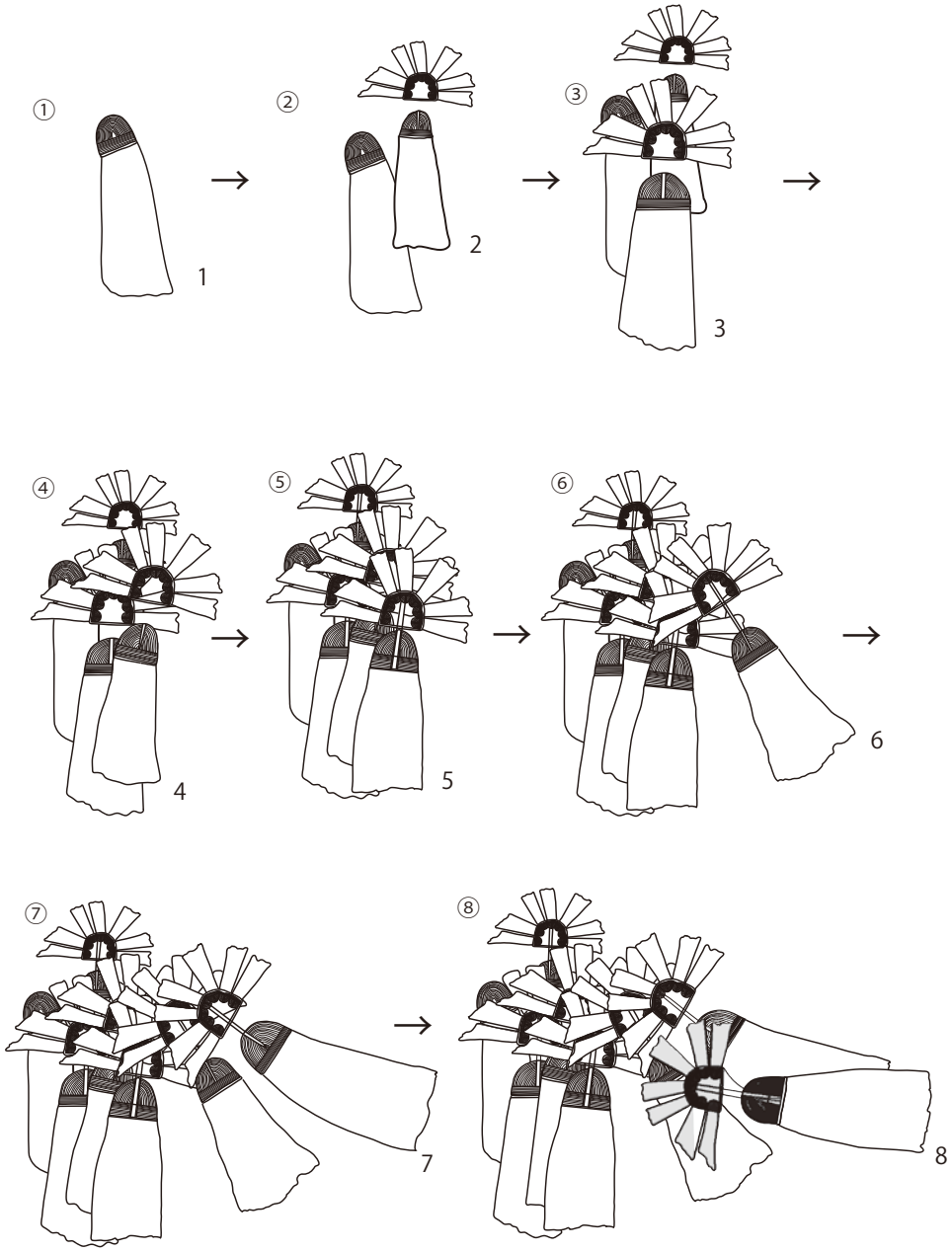
⑦ 葬具 7 を葬具 6 の北側にほぼ平行方向に置く。葬具 6 とは小型竪櫛連結部の櫛歯部分がわずかに重複し、前後関係は分かるが、大きな重複はない。方向は葬具 6 よりもさらに東で北に振れる。

⑧ 最後に葬具 8 を葬具 6、7 の上に置く。小型竪櫛連結部が葬具 6、7 の棟部に重なり、葬具 8 の棟部は最も北に位置する。方向は東でさらに北に振れ、ほぼ棺長軸方向に近く棟部が南を向く。

以上のプロセスをまとめると以下のように説明できる。

最初は単独大型竪櫛 1 が置かれ、その後 2〜5 の四つの葬具が方向を同じくして順に置かれる。置かれる際にはいずれも少しずつ位置をずらして、完全に重なることがないように配慮されている。6〜8 の北の一群は南の 1〜5 の一群とはやや北に離れた位置で方向を斜めに変えながら、順におかれていく。南の一群と同様に葬具 6〜8 は方向を変え、少しずつ位置をずらして、完全に重なることがないように配慮されている。最後に置かれる葬具 8 は赤漆で朱彩されていることから特別な意味が込められていると思われる。

このようなあり方は、単に大量の竪櫛を副葬したと見るよりは埋葬の過程の中で竪櫛、葬具を供献する儀式が執り行われたと考える蓋然性が高いをことを示しているだろう。遺体埋納過程の供献儀礼が明らかになったことは、古墳の埋葬過程を考える上で重要な視点を提供することになるだろう。



第 26 図　第 1 主体部竪櫛供献プロセス

（4）　遺体との位置関係と埋納方法

竪櫛の出土例は全国的に広くみられ、150 を超す古墳埋葬部等かから発見されている。出土の仕方は多岐に渡っており、川村氏は大きく 4 つに分類している（川村 1999）。ここでは灰塚山古墳第 1 主体部出土竪櫛の出土状況の類似例を挙げ、竪櫛供献の意味について考えていきたい。

灰塚山古墳第 1 主体部では、竪櫛群が太刀と近接して棺の中央部から出土している。第 3 図から分かるように太刀の切っ先が北方向を向いており、南からは鏡とガラス製腕飾りが出土している。切っ先の向き、他の出土遺物との関係から、被葬者は頭位を南に埋葬されたと考えられる。その際、竪櫛群は遺体の体の上（胸の位置）に置かれたものとみることができる。

灰塚山古墳第 1 主体部では上記のようなプロセスで、遺体の胸の位置に竪櫛が順々に置かれていったことが分かる。その類例として、以下の遺跡が挙げられる。大阪府高槻市土保山古墳からは棺内外から計 58 点の竪櫛が出土している（高槻市教委　1960）。その中でも遺体の頭部付近から出土した 7 点については、遺体の胸の位置に置かれたものと推測される。櫛歯は腐朽しているが、ムネの方向が一方向に揃って検出している。また、山形県米沢市戸塚山第 137 号墳では、遺体の右上腕骨に付着するように 3 点重なって出土している（米沢市教委　1983）。おそらくは元々胸の位置ないし体の上に置かれていたものが遺体の腐朽と共に落ちたものと思われる。いずれの遺跡も装具と思われる形態を成したものは出ていないが、埋納位置やその意味については灰塚山古墳と同様のことが言えると考えられる。

以上の出土竪櫛例をまとめると、遺体の上に方向を揃えて、少しずつずらして重なるように竪櫛が 1 つずつ置かれていったということが分かる。体の上に置かれたと判断できる遺跡は多くはないが、灰塚山古墳出土竪櫛群と同様の遺体埋納に伴う供献の儀式が、各地でも行われていた可能性がある。

（5）　まとめ

灰塚山古墳第 1 主体部では遺体を棺に納めた後、竪櫛と竪櫛を組み合わせた葬具を上記のようなプロセスで 1 つ 1 つ遺体の胸の位置に供献していったと考えられる。竪櫛の出土についてこれまでは、棺の中にばら撒かれた、或いは粘土槨に塗り込められた例が知られているが本例のように 1 つ 1 つ丁寧に「置いていく」という供献儀礼の一端を担っている例も見られる。今後竪櫛を使う供献儀礼が普遍的な広がりを持つか否か検討する必要があるだろう。

竪櫛埋納には寄り来る悪霊から遺体を守るという呪術的な意味を認めることができるだろうが、供献儀礼の意味するところは類例の探索を行いさらに追求される必要があろう。

なお、今回の葬具の復元を通して、棒状突起と小型竪櫛の存在が組み合わせ式の葬具の存在を示すことが明らかになった。木沢直子氏により同様の葬具が韓国にまで類例があることが明らかにされており、このような葬具が倭国内から韓半島にいたるまで広がっていることが明らかになった（木沢　2014）。従来の出土例の再検討により、葬具の存在と葬具を用いた儀礼の検討が可能になったことは大きな成果だったと考えている。

（相川ひとみ）

ま　と　め

今年度の調査では、第 5 次調査までで位置が判明していた第 1 主体部、第 2 主体部の掘り下げを実施した。

第 1 主体部では、粘土床上に設置された長大な木棺痕跡を確認した。組合せ式で舟形を呈する長大な木棺と推定され、現状では類例を求められない。床面から小型仿製鏡、ガラス製腕飾り、多量の竪櫛、大刀が乱されない状態で出土した。鏡の位置、大刀の切っ先方向から、きわめて異例であるが南西に頭を向けていると推定された。多量の竪櫛には大小があり、組合せて葬送の道具として用いられた様子が明らかにされた。竪櫛は被葬者の胸の位置に順次おかれたと見られる。遺体を棺に安置した後に組み合わされた竪櫛を何度も供献する埋葬時の供献の儀式が存在することを示す重要な発見であった。出土遺物の系譜、時期はそれぞれに今後も検討する必要があるが、現段階では 5 世紀前半から中葉にかけての時期を想定しておきたい。

第 2 主体部では確認されていた舟底状に盛り上がっていた粘土を掘り下げ、粘土層の下部に板石による石組み遺構を発見し、さらにその下層に板石で構築された石棺を検出した。石棺を石組みで覆い、その上を粘土で密封する構造はこれまで少なくとも東北地方では類例がない。管見の限りでは全国的にも例を見つけられていない。さらに石棺の側壁の外側にも粘土が充填され、もし、石棺の底石の下に粘土があるようであれば、石棺を粘土でくるむきわめて珍しい構造である可能性がある。今後の調査で明らかにしたい。石組み遺構の下、石棺の蓋石上から多量の鉄製武器が出土した。特に石棺中央部の蓋石上の西側から大刀、剣（槍、戟 ?）、30 本ほどの矢の束 2 束が発見された。これらは整然と置き並べられており、石棺内に遺体を埋葬し、蓋を被せ終わった段階で供献されたと見られる。被葬者の埋葬から棺の埋め戻しに至るまで各段階で様々な儀礼が執り行われたと見られるが、本例は被葬者を棺に埋納後行われた儀礼の様子を良く表す大変貴重な事例となった。出土遺物の検討は今後の課題であるが、組合せ式の戟が存在する可能性があり、被葬者の性格を考える上で重要な要素となるだろう。矢の束を構成する鉄鏃は長頸鏃であり、切り合い関係から第 1 主体部よりも新しい第 2 主体部の年代は 5 世紀中葉から後半に位置づけておきたい。

灰塚山古墳は調査当初前期古墳と考えていた。しかし、上述のように第 1、第 2 主体部のいずれも 5 世紀代に位置づけられ、中期古墳であることが判明した。墳丘は第 1 主体部の時期には築造されていたと考えられる。東北地方において同時期と見られる古墳は数少ないが、現状で全長 61.2 m の規模はこの時期の東北最大である。当然会津盆地でも最大の古墳で、会津盆地北部に拠点をおき、広域を支配した王者の墓とみることが可能であろう。これまで筆者も含めて古墳時代中期には会津盆地に有力な首長は存在しないのではないかと考えてきた（辻　2006）。しかし、灰塚山古墳が中期に位置づけられたことで、従

来の理解が通用しなくなった。少なくとも会津盆地の北部には会津坂下町長井前ノ山古墳、喜多方市灰塚山古墳があり、有力な勢力が存在することが明らかになったのである。第 2 主体部で発見された豊富な鉄製武器は灰塚山古墳の主が当時貴重だった鉄製品を潤沢に入手できる状況にあったことを示している。このような状況を踏まえて、会津盆地、ひいては東北地方の古墳時代中期社会像を新たに構築することが新たに重要な課題となったと考える。

また、灰塚山古墳が 5 世紀中葉から後半にかけても埋葬が存続していることが判明した。灰塚山古墳からほど近い喜多方市古屋敷遺跡は、調査の結果 5 世紀後半から 6 世紀初頭に営まれた大規模な豪族居館であることが判明し、国史跡に指定されている（和田、植村、菅　1999）。灰塚山古墳の第 2 主体部の埋葬は、まさに古屋敷遺跡の豪族居館が営まれていた時期にあたる。灰塚山古墳の規模は古屋敷遺跡で発見された豪族居館にふさわしく、居館の主の墓所であると考えられよう。

今回の調査では第 1 主体部の棺内精査と第 2 主体部の検出、供献された鉄製武器の取り上げに終始した。第 1 主体部の棺下層構造の調査、第 2 主体部石棺内の調査、箱式石棺等残された課題は多い。今後は残された課題を解明するため調査を進めていきたいと考えている。

謝　　辞

灰塚山古墳の調査の遂行にあたり、田部成彦新宮区長をはじめ新宮区の皆様、地元慶徳地区の皆様、芳賀忠夫教育長をはじめ喜多方市教育委員会の皆様にはご支援をいただきました。また、近輝夫、ノリ子ご夫妻には宿舎のご提供をいただき万端のお世話をいただきました。皆様に心から感謝申し上げます。

本学歴史学科熊谷公男先生が今年度で退官されます。25 年にわたってご指導いただきましたことに心から感謝申し上げます。ご健康に留意され、ますますのご活躍を祈念いたします。

（辻　秀人）

引　用　文　献

高槻市教育委員会　1960 『土保山古墳発掘調査概報』 高槻叢書第 14 集

伊東信雄、伊藤玄三　1964 『会津大塚山古墳』 会津若松史会津若松市編纂委員会

白石市教育委員会、1972 『鷹巣古墳群発掘調査概報』 白石市文化財報告書第 12 号

岩渕康治他　1974 『仙台市富沢裏町古墳発掘調査報告書』 仙台市文化財調査報告書第 7 集

国見町　1977 『国見町史』第 1 巻　通史・民俗

伊東信雄　1979 「福島県双葉郡浪江町上の原 3 号墳」『福島考古』 第 20 号

川崎利夫、野尻侃、横戸昭二 1979 『大之越古墳発掘調査報告書』 山形県埋蔵文化財調査報告書第 18 集

米沢市教育委員会　1983 『戸塚山第 137 号墳発掘調査報告書』 ― 戸塚山古墳群調査報告書第 I 集

伊藤玄三他　1985 『本屋敷古墳群の研究』 法政大学

渋谷孝雄、長橋至　1985 『お花山古墳群発掘調査報告書』 山形県埋蔵文化財調査報告書第 85 集

福島県立博物館　1987 年 『古墳測量調査報告』 福島県立博物館調査報告第 16 集

柏倉亮吉、阿子島功、加藤稔、江川隆　1987.3 『菅沢古墳二号墳発掘調査報告書』 山形市教育委員会

手塚均、加藤明弘　1989 「兜塚古墳第二次調査」『亘理町三十三間堂遺跡ほか』 宮城県文化財調査報告書第 131 集

滝沢誠他　1989 「七瀬 3 号古墳。4 号遺跡」『七瀬古墳群、田麦中畝古墳群』 中野市教育委員会

恵美昌之、菅井仁　1990 『愛島東部丘陵遺跡群詳細分布調査報告書賽ノ窪古墳群の測量　調査 V』 名取市教育委員会

森下章司　1991 「古墳時代仿製鏡の変遷とその特質」『史林』 第 74 巻第 6 号

杉本宏他　1991 『宇治二子山古墳』宇治市教育委員会

古川一明、高橋栄一 「念南寺古墳」『壇の越遺跡、念南寺古墳』 宮城県文化財調査報告書第 177 集

柳沼賢治他　1998 『大安場古墳群 ― 第 2 次発掘調査報告 ―』 郡山市教育委員会

和田聡、植村泰徳、菅智子　1999 『古屋敷遺跡』 塩川西部地区遺跡発掘調査報告書 4　塩川町文化財調査報告第 6 集

川村雪絵　1999 「古墳時代の竪櫛」『国家形成期の考古学 ― 大阪大学考古学研究室 10 周年記念論集 ―』

朴沢志津江　2002 『角塚古墳』 胆沢町埋蔵文化財調査報告書第 28 集

菊地芳朗　2002 「福島県会津坂下町長井前ノ山古墳 ― 合掌型石室を持つ前方後円墳の調査 ―」『考古学ジャーナル』 NO. 492

岸本一宏他　2003 『但馬の王墓茶すり山古墳調査概報』 学生社

三浦俊明他　2004 『下開発茶臼山古墳群 II ― 第 3 次発掘調査報告書』 石川県辰口町教育委員会

三浦俊明、長屋有香　2004 「下開発茶臼山 9 号墳出土の竪櫛について」『下開発茶臼山古墳群 II ― 第 3 次発掘調査報告書』 石川県辰口町教育委員会

辻　秀人　2006 『東北古墳研究の原点　会津大塚山古墳』 新泉社

菊地芳朗他　2008 『庚申壇古墳 I』 福島大学行政社会学類考古学研究室

辻　秀人　2011 「十　東北南部」『日本の考古学講座 7 古墳時代上』 青木書店

水野敏典　2013 「金属製品の型式学的研究 鉄鏃」『副葬品の型式と編年』 同成社

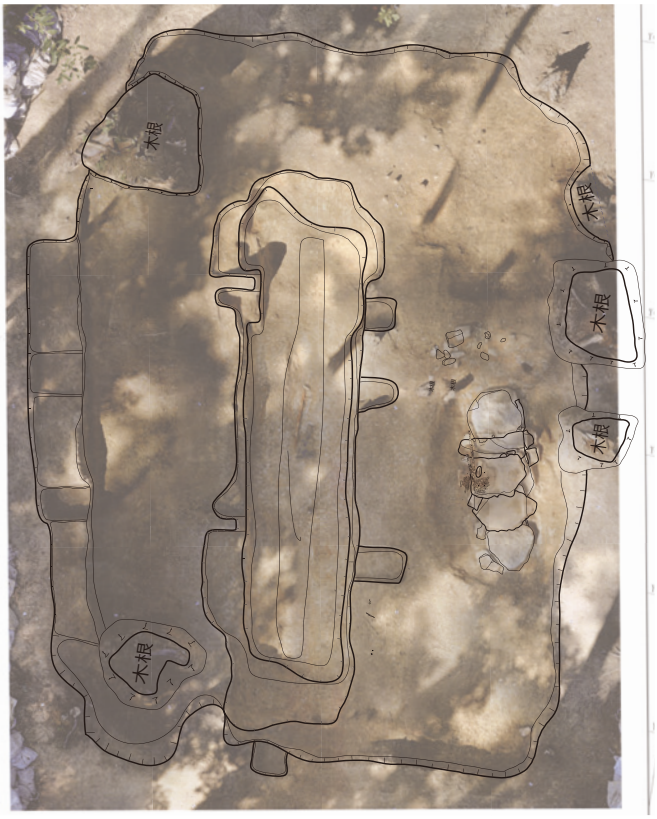
辻　秀人他　2012 年 「福島県喜多方市灰塚山古墳第 1 次発掘調査報告」『東北学院大学論集　歴史と文化』第 48 号

辻　秀人他　2014 年 「福島県喜多方市灰塚山古墳第 3 次発掘調査報告」『東北学院大学論集　歴史と文化』第 52 号

木沢直子　2014 「韓国と日本で出土した「竪櫛」の比較検討」『高興　野幕古墳　発掘調査報告書』
辻　秀人他　2015 年 「福島県喜多方市灰塚山古墳第 4 次発掘調査報告」『東北学院大学論集　歴史と文化』第 53 号
水澤幸一他　2016 『新潟県胎内市城の山古墳発掘調査報告書（第 4 次～9 次調査）』 胎内市教育委員会

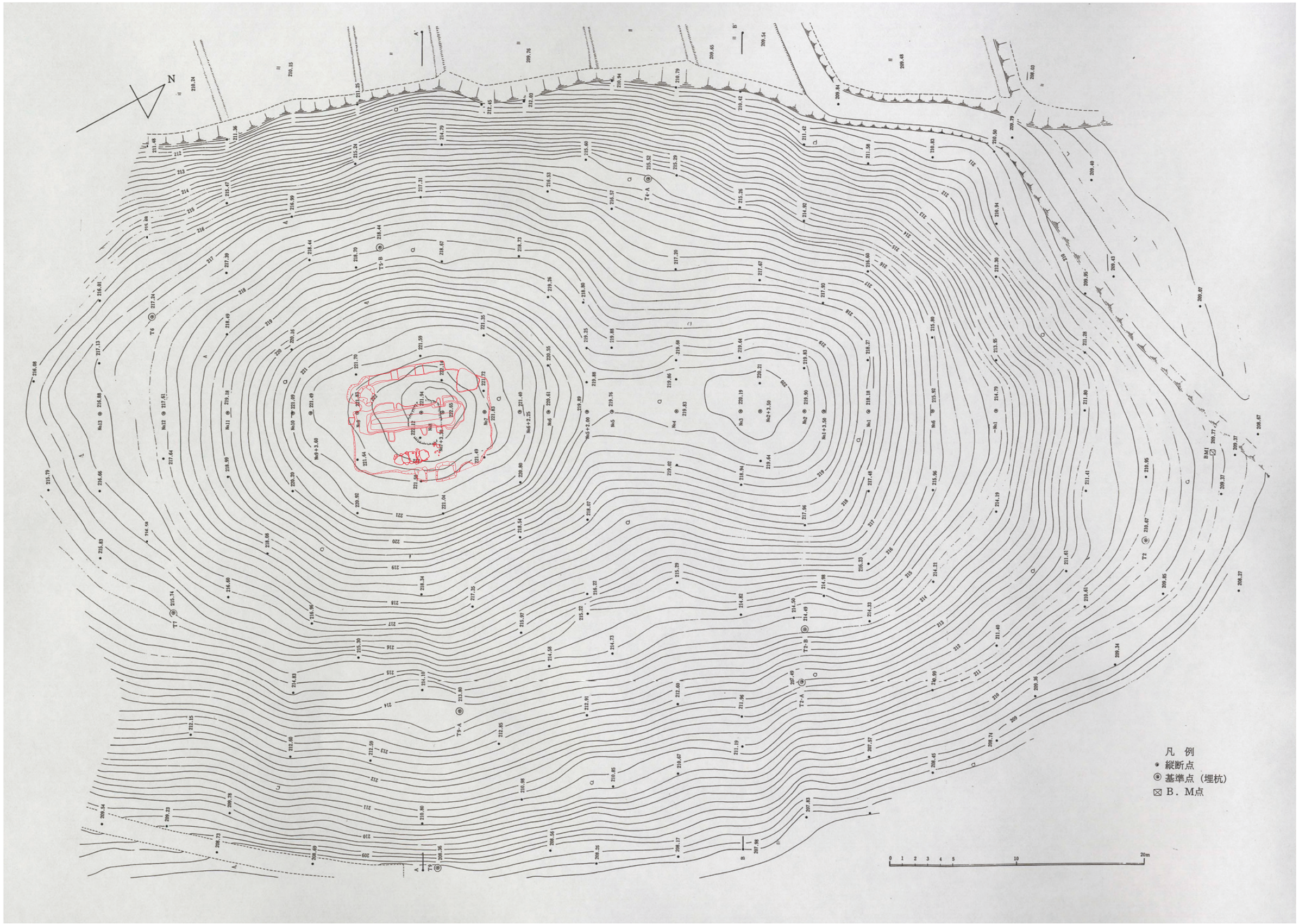
写真 47　辻ゼミナール集合写真

写真 48　第 6 次調査完掘状況



第 27 図　後円部墳頂平面図

写真 49　後円部墳頂写真（北から）



第 28 図　灰塚山古墳全体測量図（1/300）